

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.236

2013年1月

平成25年 濱口総長年頭あいさつ「新年を迎えて」



目次

●年頭あいさつ	
平成25年 新年を迎えて	3
●ニュース	
日本・インドネシア学長会議を開催	9
ハビビ元インドネシア大統領に本学名誉博士の称号を授与	10
カンボジア王立農業大学と大学間学術交流協定を締結	10
名古屋大学・成均館大学校研究交流会を開催	11
第1回石田賞授賞式を举行	11
下駄の鼻緒奨学金授与式を举行	12
平成24年度永年勤続者表彰式を開催	12
キャンパスクリーンウィークを実施	13
●知の先端	
太陽フレア爆発を予測する	14
草野 完也（太陽地球環境研究所教授）	
●知の未来へ	
天然物を組み立てる	16
横島 聡（大学院創薬科学研究科准教授）	
●部局ニュース	
近藤教授、松本教授紫綬褒章受章記念講演会を開催	17
平成24年度鶴舞公開講座を開催	17
東海がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン平成24年度市民公開講座を開催	18
工学部・工学研究科国際交流室拡充・改装記念式典を举行	18
マイクロ・ナノメカトロニクス工学シンポジウムを開催	19
「知の探究講座」講座別発表会を開催	19
平成24年国際研究集会を開催	20
第14回「まちとすまいの集い」を開催	20
国際研究集会「LHC から見る強結合ゲージ理論」を開催	21
第12回遺伝子実験施設公開セミナーを開催	21
統合物質創製化学推進事業第2回国際シンポジウムを開催	22
ICCAE 2012年度第4回オープンセミナーを開催	22
国際シンポジウム「法整備支援から法教育へ」を開催	23
第7回、第8回次世代自動車公開シンポジウムを開催	23
国際環境リーダー育成のための高等教育フォーラムを開催	24
第27回トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催	24
名古屋－延世大学間学術研究交流会2012を開催	25
クリニカル・インディケーターに関する勉強会を開催	25
第22回 IHP トレーニング・コースを開催	25
第84回防災アカデミーを開催	26
第85回防災アカデミーを開催	26
和式馬術供覧を開催	26
野外観察園秋の見学会を開催	27
観測知にふれるハンズオン・ギャラリーを開催	27
第47回博物館コンサートを開催	27
●受賞者一覧	28
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成24年11月16日～12月15日	34
●イベントカレンダー	37
●ちょっと名大史	
正門がない東山キャンパスの謎	40

平成25年 新年を迎えて —改めて「名古屋大学からNagoya Universityへ」





名古屋大学

総長 濱口 道成

謹んで新年のお慶びを申し上げます。名古屋大学全学同窓会の皆様、教職員の皆様、学生の皆様、そして名古屋大学をご支援いただいている多くの皆様、日本各地で、そして世界の各地で、良い年を迎えられたことと、お慶び申し上げます。今年が、皆様にとって明るく実りの多い年となる事を、心よりお祈りいたします。

一昨年3月、日本は東日本大震災という未曾有の災害を体験しました。2年近い月日経ち、新しい年を迎えても、現地は未だ復興とは程遠い状況にあります。また、この東日本大震災により、日本人の価値観、世界観、ものの考え方は大きく影響を受け、変化し続けているように思われます。ただ、我々が、その変化の総体を十分に理解し、復興を成し遂げるには、今しばらくの時間の経過と日々の積み重ねが必要だと思われます。改めて被災地の回復を、心よ

り祈念いたします。

年の初めのごあいさつではありますが、近年、日本は次々と厳しい局面に立たされてきました。リーマンショックに始まり、東日本大震災、そして最近は外交問題、長期にわたる円高と、様々な形で困難に遭遇してきました。他方、大変厳しい財政状況と東日本大震災支援への要請を受け、昨年は大学史上初めて、平均7.8%、教授クラスでは1割に及ぶ給与削減を行いました。震災復興を根拠とする要請については、教職員の皆様にご理解を賜らん事を改めてお願いする次第です。またこの困難な時にこそ、唯一無二の存在として、また社会に貢献する基幹研究大学として、名古屋大学の力を磨き、改革を進める事にご協力をお願いする次第であります。全学同窓会の皆様には、本年も変わらぬご指導ご鞭撻を頂けますよう、お願い申し上げます。



「防災・減災カレッジ」キックオフイベント



減災連携研究センター設立記念行事



平成24年度秋季入学式

2009年総長就任時に、大学運営の基本方針となる「濱口プラン Ver.2009」をまとめましたが、昨年より内容を一部改定し、「濱口プラン Ver.2013」とし、本学のウェブサイトにも上梓しました。今回の改定にあたって、基本とする目標は「名古屋大学から Nagoya University へ」、名古屋大学のグローバル化にあります。名古屋大学のグローバル化を進める事により、大学に多文化共生社会を導入すると共に、アジアに体験を深める名大生の教育を進め、今日的意味での「勇気ある知識人」の育成を図りたいと願っております。

昨年は、名古屋大学のグローバル化を更に深化させる事ができた年でありました。一昨年よりスタートしたグローバル30プログラム群は順調に推移しつつ2年目を迎え、UCLA レベルの優秀で個性的な人材が50名ほど集まりました。このプログラムは、秋入学ですべての授業と大学のサービスを英語で提供する学部プログラムです。

また大学院の教育改革を進めるリーディング大学院プログラムは、一昨年の2件に引き続き、昨年も、オールラウンド型「PhD プロフェッショナル登龍門（代表：杉山 直理学 研究科教授）」と、複合領域型（横断的テーマ）「フロンティア宇宙開拓リーダー養成プログラム（代表：田島宏康 太陽地球環境研究所教授）」の2件が採択されました。前者のオールラウンド型は、総合大学としての特性を活かし、留学生とともに専門を越えて切磋琢磨する



講義を受ける国際プログラム群の学生

共通の場を設定し、各研究科から募集した大学院生を5年一貫で指導しようとするプログラムです。本来の専門の教育に加え、アジアの現場での実体験を伴う実習や、「ノースカロライナ・アンビションキャンプ」と名付けたノースカロライナにおいて起業家育成を英語で行うプログラム等、次世代のアジアのリーダーを育成しようとする意欲的な企画となっています。講師陣には、産業界のトップや、前大使、前次官など個性的な人生を送ってこられた方々を迎え、アジアを教育現場として文字通り「勇気ある知識人の育成」を図ろうとするものです。今年3月には、本格活動の前のトライアルとして、零下のモンゴルでキャンプを行い、ノースカロライナに2週間ほど派遣するプログラムを実施する予定ですが、学生からは多数の応募を受け、今のところ手ごたえを得ています。

これらのプログラムとともに、昨年は名古屋大学の悲願でもあった創薬科学研究科を設立する事ができました。合わせて、細胞生理学研究センターを設立し、中部の創薬の拠点形成を目指しています。名古屋大学は長い間薬学部を創設できずにおりましたが、この間日本の創薬研究は混迷の中にあります。1980年代、日本の新薬開発は世界の28%余りを占め、米国と互角の研究活動を展開していました。しかし、2000年となって、日本のそれはわずか8%となり、一方米国は世界の創薬開発の50%を超えるシェアを占め



創薬科学研究科創設記念行事

るようになりました。何故このような現状が生まれたか。第1に大学の機能不全が明らかに存在します。米国の新薬開発はその初期段階では、大学とベンチャーが30%を超える研究活動を行っています。一方、日本の薬学は多くの場合、単なる分子生物学にのめりこんでしまったとも思えます。第2の問題点は、日本の新薬開発が、分子標的治療を明確に意識できなかった事にあります。実は細胞生理学研究センターを設立した理由は、ここにあるのです。細胞膜蛋白質の構造解析で世界トップレベルの研究を展開している藤吉好則先生をお迎えし、名大オリジナルの分子標的が具体化できる体制となりました。第3の問題点として、所謂「死の谷」、「ダーウィンの海」と呼ばれる新薬開発の壁があります。日本の高い安全・安心基準は、時に越えがたい壁となり、長い年月と限らない努力を研究者に強いることとなります。この問題を越えるために、名古屋大学医学部附属病院が、厚生労働省の臨床研究中核病院、文部科学省の橋渡し研究加速ネットワークプログラム実施拠点を獲得し、先端医療・臨床研究支援センターが設立されました。また、来年度には医学系研究科に統合医薬学研究教育コースが発足します。先端医療・臨床研究支援センターと連携しつつ、新薬開発の出口管理をできる人材の養成を進め、新薬開発が研究者の孤独な戦いに終わる事のないよう、一貫した研究開発の連携が可能となります。これらの体制は、十分機能を発揮できれば、国内では屈指の機構と



ホーチミン市法科大学における日本語教育研究センター開所式

なると期待しています。

昨年はまた、「濱口プラン Ver.2013」にも掲げております世界屈指の研究成果の創出と人材育成を具現化するものとして、本学より申請した世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）が採択され、トランスフォーマティブ生命分子研究所が活動を開始しました。教授陣には、カナダ化学会会長を含む平均年齢42歳の新進気鋭の方々をそろえ、今後の成果が大きく期待されます。またこの研究所の活動は、中長期的には創薬への強い支援ともなると期待しています。

さらに昨年は、法学研究科の法整備支援事業が、名古屋大学のグローバル化を象徴する事業として、大きく発展する年でもありました。年の初めに、中川正春文部科学大臣（当時）出席のもと、5番目の日本法教育研究センターをホーチミン市法科大学に設立しました。さらに現在ミャンマーのヤンゴン大学に同センター設立のための準備を行っています。春には、キャンパスアジアのプログラムが法学と化学の分野で活動を開始しました。法学のキャンパスアジアでは、「ユス・コム・ネ」、アジアの共通法の確立という高い理想を掲げ、活動を進めています。この法整備支援活動と合わせ、医学部の医療行政の専門家を養成する修士課程のヤング・リーダーズ・プログラムは、古川元久国家戦略担当大臣（当時）に、日本の国家戦略上重要なプログ



古川国家戦略担当大臣による医学部附属病院の視察



カンボジアで農業実習を行う学生と交流

ラムだと、高い評価を頂きました。このプログラムからは、アジアの国家の中枢を担う人材が多数育ちつつあります。古川大臣の指摘は、改めて我々の目指すべき留学生育成のモデルについて考えさせられるものでもあり、その発展形としてアジアのリーダー育成を目指す、上述のオールラウンド型リーディング大学院の構想があります。

また、農学部のカンボジアでの実習に参加し、カンボジア王立農業大学との大学間学術交流協定に調印することもできました。農学部では、5年前からカンボジア、タイで10日ほどの農業実習を行っており、多くの名大生、カンボジア人学生と現地で交流する事ができ、彼らから元気ももらう事ができました。

昨年の最も深い体験の1つとなった事として、第1回日本・インドネシア学長会議を名大で開催しました。両国よりそれぞれ30余りの大学が参加し、総勢300名の参加となる大きな会議を成功させる事ができました。通常これら学長会議の定型である大学間交流や大学の国際化のテーマに加えて、次世代自動車の開発、医療、農業を分科会のテーマに掲げた事により、多数の方々の高い関心を得る事ができました。また、会議の記念講演として、インドネシア第3代大統領のバハルディン・ユスフ・ハビビ博士の印象的な講演が実現しました。彼は混乱の中から、東ティモールの独立を誘導し、インドネシアの民主主義を強化した人

であり、また偉大な航空科学者でもあります。ハビビ博士の講演は、2月の名古屋大学レクチャー2012の دونالد・キーン コロンビア大学名誉教授の講演、10月の名古屋大学レクチャー2012の赤崎 勇本学名誉教授の講演とともに、深い思索と示唆に富み、私にとっては忘れ得ぬ講演となりました。

さて、私的な話ではありますが、震災後、パスカルのパンセの一節を、偶然の会話から、読むようになりました。有名な一節「考える葦」です。おそらく大学受験を経験し



日本・インドネシア学長会議



講演するハビビ博士



名古屋大学レクチャー2012で講演したキーン博士（右）

た人は、だれもがこの有名な一節を記憶しているに違いないでしょう。ただ、18歳の私にとって、「考える葦」という言葉の持つレトリックの奇抜さは、胡散臭い表現にしか響きませんでした。そして、「考える葦」という表現に視線を奪われ、その後続く彼の言葉には興味も抱かず、かくして彼の言葉は、記憶の彼方に霞むものとなっていました。しかし、40数年を経たこの頃、ようやく青年パスカルの言葉に耳を傾ける自分を見出しました。ようやくその深い響きに気がついたと言えます。

ここで改めて引用します。

「考える葦」

人間はひとくきの葦にすぎない。自然のなかで最も弱いものである。だが、それは考える葦である。彼をおしつぶすために、宇宙全体が武装するには及ばない。蒸気や一滴の水でも彼を殺すのに十分である。だが、たとえ宇宙が彼をおしつぶしても、人間は彼を殺すものより尊いだろう。なぜなら、彼は自分が死ぬことと、宇宙の自分に対する優勢とを知っているからである。宇宙は何も知らない。

だから、われわれの尊厳のすべては、考えることの中にある。われわれはそこから立ち上がらなければならないのであって、われわれが満たすことのできない空間や時間からではない。だから、よく考えることを努めよう。ここに道徳の原理がある。 (前田陽一、由木 康 訳)

パスカルの視線の中にある人間は、命の限界を知っているからこそ、また自然に対して非力であるからこそ、尊く映る。そして我々の尊厳は、道徳の根源は、考える事にあると。

さて、ハビビ博士と短い時間ではありましたが、記憶に残る会話を交わす機会を得ました。彼は、私の目をじっと見つめ、こんな事を言っていました。「インドネシア人の料理は、騒がしいといわれる。しかし、音も臭いも煙もない料理は、まずいものだ。」と。今我々の目の混迷とも見える激動の中にもこそ、次世代の希望が光っているのかもしれない。そして、それを見出す事ができるかどうかは、パスカルの言葉の如く「よく考え、立ち上がる」ことにあるのは確かな事です。

本年も引き続き、名古屋大学の活動にご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

名古屋大学から Nagoya University へ

<p>(1) 世界に通ずる人材の育成</p> <p>教養教育の充実 G30の推進 世界展開力の強化 リーディング大学院の推進</p>	<p>(2) 世界トップレベルの研究推進</p> <p>国際水準の若手研究者の育成 世界最先端設備を活用した研究の推進</p>	<p>(3) 組織の刷新</p> <p>創薬科学研究科の整備・展開 教育研究組織再編 大学間連携</p>	<p>(4) 地域連携・地域貢献の推進</p> <p>「知の拠点」との連携 地域医療再生</p>	<p>(5) 名大基金の充実</p> <p>5年で50億 奨学金などに活用</p> 
---	--	---	---	--

◆ 教育・研究・社会貢献など ◆

世界で活躍できる人材の育成

- ・ 教養教育の充実……教養教育院の強化、学習支援体制の充実
- ・ 日本人学生の英語力強化
- ・ 専門的能力、社会性、総合的判断力の充実
- ・ リーディング大学院の推進
- ・ 留学生教育の充実……教養教育から大学院までの英語コース設置、2020年までに留学生3,000人超へ
- ・ 語学コンソーシアム、近隣大学との提携
- ・ 基金や様々な財源を活用した奨学金制度の充実
- ・ 課外活動支援

世界トップレベルの研究推進

- ・ WPI「トランスフォーマティブ生命分子研究所」の推進
- ・ 超高压電子顕微鏡・シンクロトン光施設等を活用した最先端研究の推進
- ・ 大型研究費の獲得と推進、国際水準の研究者群への支援
- ・ 大学院生・若手教員への育成支援（YLC など）
- ・ 部局間連携による学内情報交換、共同研究の推進

グローバル化の推進

- ・ 海外協定校・AC21メンバー校等とのネットワーク強化
- ・ G30、世界展開力の強化
- ・ 世界から優秀な学生の受入れ
- ・ キャンパスの国際化

産学官・社会連携

- ・ 産学官・行政連携の推進……拠点形成、技術移転、イノベーション創出などの推進
- ・ 地方自治体との連携強化……「知の拠点」計画と連携した研究推進と学術情報発信
- ・ 社会貢献人材育成センターの拡充……産学官による人材育成
- ・ メディアとの連携強化による社会への情報発信
- ・ 同窓生・保護者・市民との交流強化

◆ 附属病院・附属学校 ◆

日本の基幹大学病院として充実

- ・ 安全で質の高い医療の提供
- ・ 次世代の医療を担う人材の育成と地域貢献……専門医育成キャリアパスの確立……卒後臨床研修ネットワークの強化……地域医療再生に向けたリーダーシップの発揮
- ・ 未来を切り拓く先端医療の開発……TRの推進、先端医療推進機構の設置……中部先端医療開発円環コンソーシアムの推進
- ・ 医療のボーダレス化に備えた国際化とIT化の推進

◆ 業務運営・財務内容など ◆

教育研究組織の刷新・管理運営の効率化

- ・ 全体最適化を目指した組織の見直し・再編
- ・ 創薬科学研究科、素粒子宇宙起源研究機構等の整備
- ・ 多様な大学間連携の推進
- ・ 信頼感ある大学経営の推進
- ・ 教育・研究環境の整備……支援事務組織の拡充、組織・会議の整理
- ・ 男女共同参画の推進

安定財務基盤の構築

- ・ 科学研究費補助金、受託研究費などの高水準を確保
- ・ 健全な経営に基づく附属病院財務基盤の確立
- ・ 名大基金の充実と恒常的寄附金の確保……5年で50億、奨学金などに活用

自己点検・評価・情報発信

- ・ 教育研究組織の3年毎の現況調査実施
- ・ 教員プロフィール情報の充実と教員活動状況の発信
- ・ 組織を代表する研究成果、意欲的な授業の情報発信強化
- ・ 世界トップ100大学の恒常的維持

施設・安全・その他

- ・ エコキャンパスの推進
- ・ 大学施設・設備の新管理制度導入
- ・ 全学スペースの集中化による有効活用
- ・ 留学生宿舎・外国人教員宿舎の充実
- ・ 研究教育基盤設備の充実とキャンパス環境整備
- ・ ハラスメント・苦情への迅速かつ適切な対応
- ・ 化学物質、放射性物質等の法令に基づく適切な管理
- ・ 労働安全衛生の徹底
- ・ 災害対策・法令遵守・危機管理の徹底

附属学校の充実

- ・ 「教育学部附属学校協議会」によるマネジメントの強化
- ・ 中高大連携による教育の充実
- ・ 海外高校生受入体制の構築と整備

名古屋大学は、自由闊達な学風の下、未来を切り拓く勇気ある知識人を育て、世界屈指の知的成果を産み出します。



日本・インドネシア学長会議を開催



記念撮影

日本・インドネシア学長会議が、11月15日(木)、16日(金)の2日間、理学南館大講堂等において開催されました。

同会議は、「連携のための対話－A Dialogue for Partnership－」をメインテーマとし、東海地区の5つの国立大学(岐阜大、愛知教育大、豊橋技術科学大、三重大及び本学)が、インドネシア国立大学学長協議会と連携して開催したもので、日本とインドネシア間で開催する初めての学長会議となりました。両国合わせて60校の大学が参加し、会場は参加大学からの代表団のほか、分科会で招へいされた講師やインドネシア人の留学生等で立見が出るほどの盛況でした。

初めに、濱口総長及び同協議会長であるイドゥルス・パトルーシ ハサヌディン大学長があいさつを行い、次いで、山中伸一文部科学省審議官、ムハマド・ヌー駐日インドネシア共和国教育文化大臣、ムハマド・ルツフィ駐日インドネシア共和国全権特命大使、浅島 誠日本学術振興会理事らが来賓祝辞を述べました。

続いて基調講演が行われ、日本からは、小平信因トヨタ自動車株式会社代表取締役副社長が「自動車産業を取りまく環境変化とグローバル人材」と題し、同社を支える人

材及びその育成戦略について紹介し、課題提起を行いました。インドネシアからは、同国第3代大統領を務めたバハルディン・ユスフ・ハビビ博士が「持続可能な開発・成長のための2国間協力」と題し、一国のリーダーとして、また技術者・研究者として、さらには1人の人間としての視点から、豊富な話題を織り込み講演しました。講演は自伝を基にした映画の上映を挟んで90分間にわたり、参加者は、情熱と人間味溢れる話し振りに魅了された様子でした。

続いて行われた分科会では、次世代自動車とグリーンエネルギー、高度専門職業人育成のためのインドネシアを含む国際教育連携コンソーシアムの形成、高等教育高度化のための日本・インドネシア国際連携、国際共同教育の実質化、インドネシアにおける健康科学強化のための産学連携の5つのテーマに分かれ、それぞれ議論を重ねました。分科会での議論は、翌日の全体会合において報告され、会議参加者に共有されました。

閉会セッションにおいては、パトルーシ学長から、学長会議の成果を文書として取りまとめた旨の提案が出され、インドネシアの国立大学において女性で初めて学長となったバディア・ベリザデ スリウィジャヤ大学長により、共同宣言案が読み上げられました。共同宣言は、研究交流の必要性と学長レベルの会合の継続開催をうたったもので、全会の賛同を得て採択されました。最後に、榊 佳之豊橋技術科学大学長が閉会のあいさつを行い、「対話から実行へ」と今後の展開に対する期待を述べ、両国の参加者から送られた満場の拍手のうちに会議は締めくくられました。

同会議は、様々な機関から多くの参加があったことだけでなく、東海地区の大学が協力して開催準備にあたり、また分科会を設け議論の専門性を高めるなどして、既存の連携を更に深め、新たな大学間連携や共通の課題を見出すことができたことから、日本とインドネシアとの大学間交流の展開における記念すべき機会となりました。



基調講演をする小平副社長



共同宣言を読み上げるベリザデ学長

ハビビ元インドネシア大統領に本学名誉博士の称号を授与

インドネシア共和国第3代大統領を務めたバハルディン・ユスフ・ハビビ博士に対する名古屋大学名誉博士の称号授与式が、11月15日(木)、野依記念物質科学研究館において挙行されました。ハビビ博士は、同月15日(木)、16日(金)の2日間開催された日本・インドネシア学長会議において基調講演を行うため、本学に来学していました。



記念撮影

同氏は、長年にわたり航空工学者としてドイツ及びインドネシアで活躍し、航空工学における世界的な賞であるテオドール・フォン・カルマン賞やエドワード・ワーナー賞を受賞するなど、研究者・技術者として優れた功績を残しています。また、行政的手腕を発揮し、インドネシアにおける科学技術振興の基盤を築きました。

本学は、国を越えて活躍する研究者、技術者、科学技術振興の政策立案者としてのハビビ博士を「勇気ある知識人」として高く評価し、併せて現在に至る本学への留学生派遣及び研究交流の基礎を築いた貢献を踏まえ、名誉博士の称号授与を決定したものです。

授与式には、本学役員及び教職員のほか、インドネシアからの留学生も立ち会い、出席者は100名を超えました。留学生によりインドネシアの伝統的な竹管楽器であるアングクルンの演奏が行われるなど、厳かな中にも賑わいと温かみのある式典となりました。

式典に続いて留学生や研究者との意見交換セッションが開かれ、ハビビ博士は、基調講演に始まり同日3度目の登壇にもかかわらず、学生の質問に対し、予定時間を超過して熱心な回答と励ましを送りました。

カンボジア王立農業大学と大学間学術交流協定を締結

濱口総長は、11月23日(金)、24日(土)の2日間、カンボジア プノンペンを訪れ、カンボジア王立農業大学と大学間学術交流協定を締結するなどしました。

同大学とは、2000年以來、農学国際教育協力研究センター、大学院生命農学研究科、大学院国際開発研究科が様々な分野で交流を続けてきており、2008年には大学院生

命農学研究科との間で部局間学術交流協定を締結しています。その後、さらに全学的な交流が強化されたことにより、今回の大学間学術交流協定の調印に至りました。

同協定の締結に先立ち、総長は、学生のフィールドワークに参加しました。これは、農学部が同大学と共同で行っているもので、本学の学生がカンボジアとタイを訪問し、それぞれの国の学生とチームを組んで、政府機関関係者、民間業者、さらには農村部の生産者らにインタビューを行うなどし、報告をまとめるものです。総長及びノ・ブントアンカンボジア王立農業大学長らを前にした合同発表会では、渡航前の綿密な事前研修やメール等での事前打ち合わせに始まり、現地での共同実習を経て、学生たちが目覚ましい成長を遂げた様子が見て取れました。

平成23年度から、文部科学省によるショートステイ、ショートビジットへの補助制度が始まったことにより、今後も、留学生の短期派遣・受入プログラムの開発が促されるとともに、学生の経済的負担が軽減され、学生交流が一層促進されることが期待されます。

また総長は、大学院法学研究科と部局間学術交流協定を結んでいるカンボジア王立法経大学を訪問し、就任後間もない新学長と今後の連携について意見を交わしました。



調印式における記念撮影

名古屋大学・成均館大学校研究交流会を開催

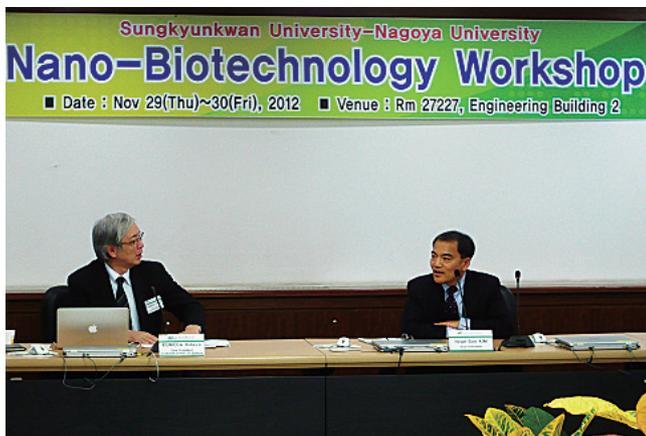
名古屋大学・成均館大学校研究交流会が、11月29日(木)、30日(金)の2日間、韓国の成均館大学校において開催されました。

本学と成均館大学校は、2009年に大学間学術交流協定を締結し、大学院工学研究科のプラズマ分野や大学院法学研究科のキャンパス・アジア構想などにおいて、活発な交流

を行っています。2010年には、相互に両大学を紹介することを目的とし、本学において、金 成均館大学校工学部長(当時)をはじめとする8名を迎えて交流会を開催しました。今回の研究交流会は、相互に両大学の研究活動を紹介し、さらなる交流発展の基盤を築くことを目的として開催したものです。

本学からは、研究・学生支援を担当する國枝副総長をはじめ、医学部附属病院長である松尾副総長、定形法学研究科長、篠原理学研究科長、鈴置工学研究科長、若林医学系研究科副研究科長、堀 勝工学研究科教授が、成均館大学校からは、金賢秀副学長をはじめ劉址範工学部長、鄭明熙サムスン融合医科学院長、韓銓建先端プラズマ表面技術センター長ら6名が出席し、各研究科等における研究内容を発表しました。

意見交換会では、専門分野における研究者間の交流の深化や学生の教育面での交流などについて協議し、来年度は本学において交流会を開催することを合意し、閉会しました。



意見交換する國枝副総長(左)と金副学長(右)

第1回石田賞授賞式を挙行

第1回名古屋大学石田賞授賞式が、11月16日(金)、本部1号館第2会議室において挙行されました。

同賞は、財団法人石田財団からの寄附の意志に基づき、将来の発展が期待できる優れた研究能力を有する若手研究者を顕彰し、その研究意欲を高めて研究の発展を支援する目的で、今年度から創設されたものです。人文・社会科学、

自然科学の両分野で、愛知県、岐阜県、三重県内の研究機関で研究する若手研究者を対象として募集を行いました。慎重な審査の結果、梶原義実文学研究科准教授(人文・社会科学分野)、浜坂 剛自然科学研究機構分子科学研究所助教(自然科学分野)の2名を受賞者として決定しました。

授賞式には、濱口総長並びに國枝副総長、杉山理事ら審査委員が出席し、総長から「今回の受賞を励みに、今後も高い志をもって自らの研究に精進し、我が国の学術研究の発展に貢献していただきたい」旨のあいさつがあり、國枝副総長から受賞者の紹介及び研究テーマについての審査講評がありました。受賞者からは、「今回の受賞は、光栄なことであり、今後もますます研究に精進したい」と謝辞がありました。

その後、応接室において、受賞者及び授賞式出席者の懇談が行われ、研究の動機や今後の研究の発展性について意見交換しました。



総長からの賞状授与の様子

下駄の鼻緒奨学金授与式を挙

下駄の鼻緒奨学金授与式が、12月7日(金)、豊田講堂第5会議室において挙行されました。

下駄の鼻緒奨学金は、学術憲章の基本理念及び寄附者の意向に基づき、本学の学部又は研究科に在学する人物で、成績が優秀でありながら経済的な理由により修学が困難な学生に対して、その学習・研究等の活動を奨励するために



記念撮影

平成22年度に設立されたものです。

授与式では、学生支援を担当する國枝副総長から「学生時代に下駄の鼻緒を切らし困っていた本奨学金の寄附者に、下駄の鼻緒を譲り渡した通りがかりの女性がかけた、『お礼は自分ではなく次に困っている人に返してください』との言葉の通り、社会還元の精神を持ち、奉仕の精神、互いに助け合う精神を受け継いで、さらに学業や研究に励んでいただきたい」とあいさつがあった後、日本人学生2名、外国人留学生2名の受賞者に、奨学生採用通知書及び奨学金目録が授与されました。

授与式終了後には、國枝副総長及び奨学金選考委員会委員と受賞者との懇談会が行われ、和やかな雰囲気の中で、勉学内容や研究内容、進路等について意見が交わされました。

平成24年度永年勤続者表彰式を開催

平成24年度名古屋大学永年勤続者表彰式が、11月22日(木)、本部1号館第2会議室において挙行されました。

被表彰者31名のうち22名が出席した表彰式では、濱口総長が一人ひとりに表彰状を手渡した後、「日本は今、非常に厳しい状況になっておりますが、その中で、名古屋大学はしっかりと活動をずっと続けてきました。その陰に



記念撮影

は、皆さんの日々の笑顔と毎日の誠実な仕事の積み重ねがあったと思います。20年というのを人間の一生で考えますと、赤子が成人となる年月であり、皆さんの仕事においても、いよいよ実力を発揮していただく時代へと入っていきます。私の好きな言葉の一つにアンドレ・ジッド『毎日、平凡なことを、平凡に行うことは、非凡である』という言葉があります。日々の誠実な積み重ねが、日本人らしい社会を作るのだと思います。皆さんも、引き続き、笑顔と誠実な仕事をもって名古屋大学を支えていていただきたい。それが、この大学で学んでいる若い世代にも伝わり、そして、日本の次の世代が育っていくのだと思います」と祝辞を述べました。

その後、被表彰者を代表して山本利幸文系総務課掛長から、「今日を契機に、微力非才ではありますが、名古屋大学の更なる発展に少しでも寄与できるよう精励いたす所存であります」と決意のこもった謝辞が述べられました。

最後に、本部2号館玄関において記念撮影が行われました。

キャンパスクリーンウィークを実施

大学構内環境美化運動「キャンパスクリーンウィーク」が、12月10日(月)から14日(金)まで、全学教職員及び学生の協力を得て実施されました。

これは、環境保全に対する関心を高めるため、環境月間である6月と併せて、平成元年から年2回実施しているもので、名古屋市の一構成員であるという認識のもと、境界の外周道路清掃も併せて行い、環境美化に努めています。



説明を受ける職員

本部では、12月12日(水)の午後、晴天の中、竹下事務局長をはじめとした約120名が、一斉に東山キャンパス構内及び周辺の市道に分かれて、空き缶・紙くず等の除去、落ち葉の収集、不要なビラ等の撤去などの作業を行いました。名古屋市のごみ分別区分が変更されて2年近くが経過したこともあり、参加者の分別意識が全体的に高くなってきていました。



清掃の様子

太陽フレア爆発を予測する

草野 完也 太陽地球環境研究所教授

凍てつく新年の朝、地平線の彼方に現れる陽光の輝きは私たちに新鮮な希望とぬくもりを感じさせます。太陽はそれほど私たちの心と生活に深くつながった身近な天体です。実際、太陽は地球上の全ての生命に恩恵を与え、我々の生存環境を維持してくれています。しかし、太陽がそうした穏やかな“母なる星”の姿からかけ離れた激しい素顔を持つことを、現代の天文学は暴き出しました。

1859年9月1日、英国の天文学者キャリントン は太陽黒点の観測中に黒点が突然明るくきらめく現象「太陽フレア」を発見しました。その日の夜、通常は極域にしか現れないオーロラがパナマやハワイでも目撃され、インドでは激しい地磁気の変動が起きたことが記録に残されています。「キャリントン・イベント」と呼ばれるこの一連の現象は、太陽フレアが地球の環境に大きな影響を与えることを我々に知らしめました。

現代社会は高度な電子機器や人工衛星に強く依存しているため、キャリントンの時代とは比べものにならないほど太陽フレアの影響を受けやすくなっています。実際、多くの人工衛星や通信・電力システムがこれまでフレアによって被害を受けており、1989年には太陽フレアが引き起こした磁気嵐によってカナダ・ケベック州で大規模な停電が発生しました。

キャリントンが見たフレアは過去400年間で最も激しい影響を地球に与えたと考えられていますが、もし同規模の現象が現在起きればその被害総額は2兆ドルを超えるとも試算されます[1]。さらに、精密な恒星観測によれば、他の太陽型恒星ではキャリントン・フレアの100倍を超えるようなスーパー・フレアも発生していることが見出されています。そうした現象がなぜ起きるのかを知り、さらにいつ起きるのかを事前に予測することは、天体現象を理解するためだけでなく、現代に生きる我々の生活を守るためにも極めて重要です。

太陽フレアは黒点の周辺に蓄積された磁気エネルギーが突発的に解放される現象で、水爆の100万倍以上のエネルギーを放出する太陽系最大の爆発です(図1)。フレアは黒点につながる磁力線が複雑に絡み合い不安定化する結果として発生す

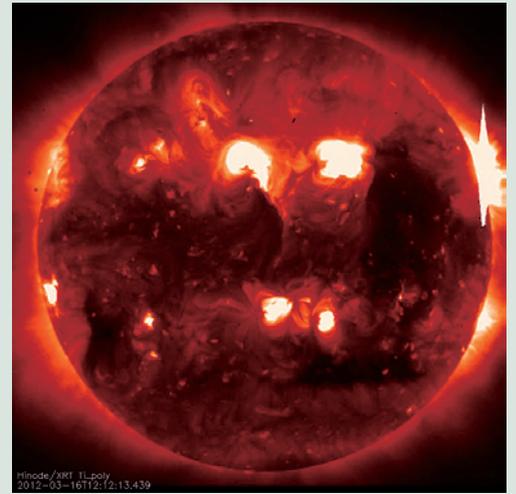


図1 ひので衛星が観測した太陽コロナのX線像。太陽フレアは局所的に明るい活動領域で突発的に発生する。JAXA/ISAS 提供。

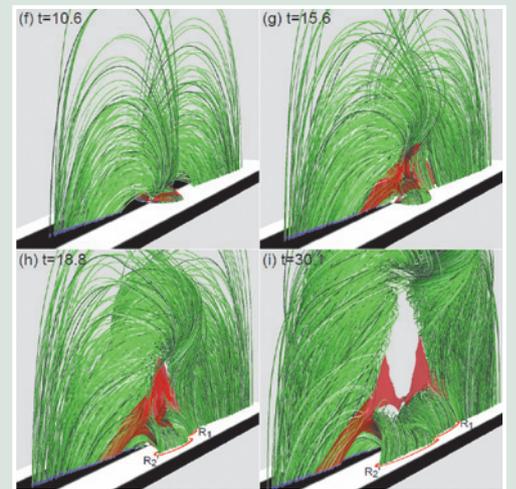


図2 反極性型磁場を原因として発生する太陽フレアの計算機シミュレーション。磁力線(緑の線)と共にプラズマが上空へ放出される。赤い面は太陽コロナ中の電流層を示す。

ると考えられています。しかし、そのメカニズムの詳細は十分に解明されていないため、フレアが「いつ」「どこで」「どれ程の規模」で現れるかを正確に予測することはまだ実現できていません。

最近我々はこの問題を解決するため、スーパーコンピュータを用いて100通り以上の異なる磁場構造に関してそれぞれフレア発生の有無を調べる大規模な数値実験(電磁流体力学シミュレーション)を行いました。その結果、捻じれた磁場中に

「反極性型」または「逆シア型」と呼ばれる2種類の特異な構造を持つ小規模な磁場が現れたときにフレアが発生することを見出しました(図2)。

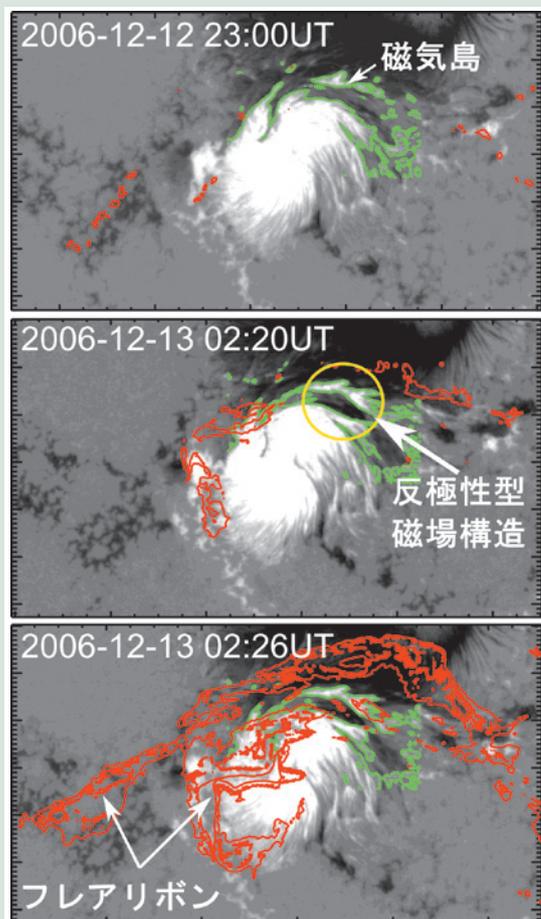


図3 2006年12月13日に発生した太陽フレアの「ひので」衛星による観測結果。グレースケールは太陽表面磁場を、赤線はカルシウム線による発光を示す。小さな磁気島が反極性型磁場構造に成長した後、明るい2本のリボン状フレアが現れたことが分かる。緑線は磁場の極性が変わる磁気中性線。

さらに、発生するフレアの規模は大規模な磁場の捻じれが強いほど大きくなることも明らかにしました [2]。

この結果を検証するため、日本の太陽観測衛星「ひので」が2006年と2011年に観測した太陽フレアのデータを解析したところ、シミュレーションが予測した磁場構造のいずれかが太陽表面に現れた数時間後に、その領域で太陽フレアが発生したことを確認しました(図3)。また、さらに過去に観測された複数の太陽フレアも、予測に一致する磁場構造を伴っていることを見出しました[2]。

磁気エネルギーの爆発的解放現象は太陽以外の様々な天体や核融合を目指したプラズマ実験においても現れるため、フレア発生の原因となる磁場構造を初めて特定したこの研究は宇宙空間物理学やプラズマ物理学にとっても貴重な成果です。さらに、特定の磁場構造がフレア発生の条件であるならば、観測からフレア発生を事前に予測することも可能となるでしょう。現在我々は、太陽表面磁場の観測データよりフレアを予測する新しい研究に着手しています。

未来の文明が「母なる星」太陽と共に生きていくためには、その真の姿を正しく知ると共に、その変動を予測する力を獲得する必要があります。高度な計算能力と精密な観測技術の融合によって、太陽地球環境研究は新たな進展を遂げつつあります。

- [1] Severe Space Weather Events, 2009, National Research Council of the National Academies, The National Academies Press.
- [2] Kusano et al. 2012, The Astrophysical Journal, 760, 1, article id. 31.

1959年北海道室蘭市生まれ。北海道大学理学部卒業。広島大学大学院修了後、広島大学助手、助教授、海洋研究開発機構地球シミュレーションセンタープログラムディレクター等を経て2009年より現職。太陽物理学のみならず、核融合プラズマ、天体ダイナモ、惑星磁気圏、雲物理、シミュレーション科学などの学際研究を手掛けている。著書に「階層構造の科学—宇宙・地球・生命をつなぐ新しい視点」など。趣味は登山、天体観測、音楽鑑賞。

くさの かんや



天然物を組み立てる

天然の動植物より単離された低分子有機化合物、これをわれわれは天然物と呼んでいます。天然物は古くから医薬品開発において重要な位置を占めてきました。青カビから偶然発見されたペニシリンは感染症の脅威から人類を開放し、ケシの実から得られ麻薬として良く知られるモルヒネは、癌疼痛の緩和になくてはならない薬の一つです。単離される天然物がそのまま医薬品として用いられるだけでなく、エリブリンやフィンゴリモドのように、天然物の生物活性および構造を基盤とした医薬品開発も行われています。

そのような天然物を、私達の研究室では有機合成化学の手法を用いて、人工的に組み立てようとする研究を行っています。このような研究は「全合成研究」と呼ばれます。容易に手に入る化合物を原料として用いて、有機反応を施し、別の化合物へと変換します。通常は一段階の反応だけで全合成が完了することではなく、変換して得られる生成物を新たな原料として、更なる変換を行い、目的とする天然物へと導きます。有機合成化学の知見を用いて合成計画を立てますが、合成が進むほど、化合物の中に多くの部分構造（官能基）が存

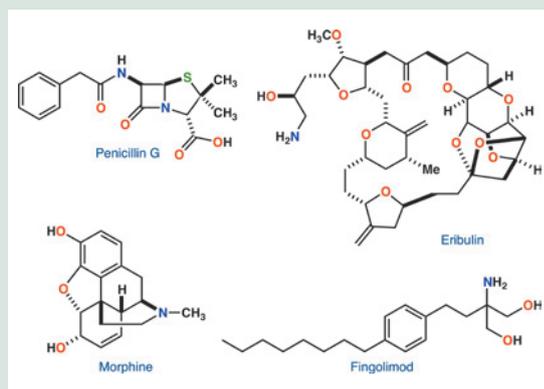


図1 医薬品として用いられている天然物(ペニシリン、モルヒネ)と、天然物がもととなって開発された医薬品(エリブリン、フィンゴリモド)の例。



写真1 有機反応の様子。一般的には反応容器(フラスコや試験管)の中で原料を溶媒に溶かし、反応剤を加えることで有機反応を行う。空気中の水や酸素の影響を排除するために、不活性ガス雰囲気下で反応を行うことが多い(風船にはアルゴンが満たされている)。反応容器に入れた攪拌子を、マグネチックスターラー(反応容器の下の装置)にて磁力を用いて回転させることで、反応溶液を攪拌することができる。

在するようになり、予想する反応が必ずしも進行しなくなります。この状況は研究としては辛いところですが、何が問題かを明らかとして、それを解決する策を工夫することで、新たな有機合成化学の知見を得ることができます。また場合によっては全く予期しなかった反応が進行することもあります。これは絶好のチャンスであり、何が起こったのかを精査することで、新反応発見へとつながるかもしれません。

全合成研究の意義はさまざまあり、医薬品開発の視点から見ると、(1) 構造未知の天然物の構造決定、(2) 天然からわずかにしか得られない希少天然物の供給、(3) 天然物の構造改変・誘導体化の基盤の確立、などが挙げられますが、もっと広く有機化学の発展の場としても重要であり、実際に天然物の全合成研究を契機として発見されてきた知見が数多くあります。そんな「分子の世界の物語を聴く」楽しみを味わいながら研究を行っています。

近藤教授、松本教授紫綬褒章受章記念講演会を開催

●大学院理学研究科

大学院理学研究科は、11月28日(水)、理学南館大講堂において、近藤孝男理学研究科教授及び松本邦弘同教授の紫綬褒章受章記念講演会を開催しました。これは、平成23年春の褒章において近藤教授が、平成24年春の褒章において松本教授が紫綬褒章を受章したことを記念し、開催されたものです。



講演会場の様子

初めに、松本教授が「モデル生物の遺伝学から生体応答シグナル伝達機構を探る」と題し、現在研究している切れた神経細胞を再生させる仕組みなどを、動画を使って説明しました。本学での研究に至る経緯や他機関での経験などもユーモアを交えて紹介し、「美しい研究」を探求する松本教授の姿勢がうかがわれる講演となりました。

続いて、近藤教授が「シアノバクテリアの1日を刻むタンパク質 KaiC」と題し、現在の研究に至る経緯を語った後、24時間周期で化学変化を繰り返すタンパク質 KaiC について、スライドを使って詳細に解説をしました。質疑応答でも、学生の質問に対し、丁寧に分かりやすい説明を行いました。

会場には、学生を中心に学内外から250名を超える参加者があり、両教授の講演に熱心に聞き入っていました。

講演会後に行われた懇談会では、國枝副総長が祝辞を述べ、饗場弘二鈴鹿医療科学大学教授から乾杯のあいさつがありました。写真撮影を行うなどして終始にぎやかな雰囲気の中進行し、最後に、同研究科の教員及び学生から両教授に花束が贈呈されました。

平成24年度鶴舞公開講座を開催

●医学部

医学部は、11月17日(土)、医学部附属病院中央診療棟講堂において、平成24年度鶴舞公開講座を開催しました。同講座は、市民向け公開講座として、社会的に関心が高く日常で役立つ話題をテーマに、平成17年度から年1回開催しているものです。

「疾病予防：健やかな老いのために」と題した今回は、



葛谷教授による講演の様子

葛谷雅文医学系研究科地域在宅医療学・老年科学教授による「長寿社会における高齢者の疾病・虚弱予防」、濱嶋信之同研究科予防医学教授による「長寿社会におけるがん予防」、青山温子同研究科国際保健医療学・公衆衛生学教授による「世界の健康を考える」の3つの講演を行いました。加齢やがんなどの身近な話題から、開発途上国をはじめとした世界の医療の現状まで、短い時間ではありましたが、バラエティに富んだ講演となりました。

当日は、あいにくの雨模様となりましたが、リピーターを多く含む20代から90代の幅広い年齢層の約150名が受講し、講演を熱心に聞くだけでなく、活発な質疑応答が行われました。

受講者からは、「大変参考になった」、「来年度以降もぜひ参加したい」という声が多数聞かれました。

東海がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン平成24年度市民公開講座を開催

●大学院医学系研究科

大学院医学系研究科は、12月2日(日)、医学部附属病院において、東海がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン平成24年度市民公開講座「生きる意味について考える」を開催しました。

最初に高橋医学系研究科長から、開会のあいさつと、東海地域の7大学によって平成24年から新たに始まった「が



会場の様子

んプロフェッショナル養成基盤推進プラン」について紹介がありました。その後、がん相談員である黒柳佳代医学部附属病院化学療法部看護師から、「知っておこう がんの情報」と題して、がんの情報の入手や、がんにならないための予防などについて講演がありました。

続いて、京都大学大学院医学研究科講師である大下大園飛騨千光寺住職から、「生きる意味～老、病、死をのりこえて～」と題して特別講演がありました。大下住職は、高山市内のクリニックで臨床心理相談員も務めていることから、医療チームの一員として患者や家族の精神的ケアにあたる中で実際に経験したこと、さらに、全国各地で講演活動を行う中で、最近被災地において経験したことなどを語り、参加者は貴重な話に興味深く聞き入っていました。最後は、大下住職が臨床の場に音楽療法を取り入れていることから、同氏によるハーモニカ演奏にあわせて「ふるさと」の歌を全員で合唱して締めくくりました。

愛知県からを中心に112名の参加があり、終了後のアンケートでも「分かりやすい内容だった」、「有意義だった」といった意見が多数寄せられました。新たに始まった同プラン初年度にふさわしい内容の公開講座となりました。

工学部・工学研究科国際交流室拡充・改装記念式典を挙行

●工学部、大学院工学研究科

工学部及び大学院工学研究科は、11月22日(木)、工学研究科7号館において、工学部・工学研究科国際交流室の拡充・改装記念式典を挙行了しました。今回の拡充・改装工事は、同学部・研究科の国際化に賛同する株式会社前田シェルサービスの寄附により行われました。

当日は、留学生教育を担当する西山聖久工学研究科講師



看板を掲げる鈴置研究科長(左)と前田相談役(右)

から、寄附に至る経緯の説明があった後、鈴置同研究科長から、前田貞夫株式会社前田シェルサービス相談役へ、お礼の言葉とともに、同学部・研究科の国際化への貢献に対する感謝状が贈呈されました。その後、前田相談役からあいさつがありました。

式典には学部を問わず30名を超える留学生関連の教職員が集まり、今後の大学の発展において国際化が重要になることが強調され、今後の同室のさらなる活動が求められていることが確認されました。

工学部・大学院工学研究科は、今回の拡充・改装工事により以前の数倍の広さになった国際交流室を、同学部・研究科留学生支援サークルの立ち上げや種々の勉強会の開催等にも利用し、留学生と日本人学生の交流の場としてより積極的に活用できるよう、さらに整備を進めていく考えです。

マイクロ・ナノメカトロニクス工学シンポジウムを開催

●大学院工学研究科

大学院工学研究科附属マイクロ・ナノメカトロニクス研究センターは、12月4日(火)、ES総合館ES会議室において、マイクロ・ナノメカトロニクス工学シンポジウムを開催しました。

同センターは、平成21年に、マイクロ・ナノメカトロニクス工学分野に関わる学際的な研究課題に対し、横断的な



シンポジウムの様子

組織体制で解決を図る研究拠点として設置され、それ以降、同分野における世界的研究拠点センターとして研究を推進しています。今回のシンポジウムは、同分野における最新情報を社会に発信することを目的として開催されました。

まず、福田同センター長が、マイクロ・ナノメカトロニクス工学分野の将来展望について概説しました。続いて、同分野の最前線で活躍している5名の研究者が、今年度開催された国際会議での話題を中心に、それぞれ「光マイクロ・ナノデバイス」、「マイクロセンサー」、「マイクロデバイスシステム」、「ナノデバイスシステム」、「マイクロ分析システム」に関する最新研究動向を論じました。同分野に関心をもつ多数の研究者が学内外から参加するとともに、熱心な質疑、討論が行われ、有意義なシンポジウムとなりました。

同センターは、今後もマイクロ・ナノメカトロニクス工学の拠点研究センターとして、同分野の情報発信に努める考えです。

「知の探究講座」講座別発表会を開催

●大学院多元数理科学研究科

大学院多元数理科学研究科は、12月8日(土)、多元数理科学棟において、「知の探究講座」講座別発表会を開催しました。

同講座は、愛知県の高校生に比較的高度な理数教育を受ける機会を与え、優れた人材を育成することを目的とした理数教育推進事業で、県内の6大学において実施されてい



発表を聞きながら課題を確認する高校生

ます。本学では、「数学は何をする学問なのか」、「数学は何を問題にしてきたのか」、「現在の数学は何を研究しているのか」、といった素朴な問いに、同研究科の3名の教員が答える内容となっており、夏期休暇中と第2学期の土曜日に計7回行われました。

今回の講座別発表会では、各講師から出された課題に基づき、参加した高校生自身がこれまでの学習の成果を発表しました。33名の参加者が2つの会場に分かれ、1人15分ずつ教壇に立って発表を行いました。内容は、バビロニアの数学、平方根の近似、ランダムウォーク、目隠し追い掛け問題、フラクタル、情報の圧縮理論など多岐に渡っていました。多くの参加者にとって、このように発表するのは初めての体験だったようですが、堂々と聴衆に質問を投げかけたり、模型を作成して説明したり、プレゼンテーションソフトウェアを使いこなしたりと、工夫を凝らした発表を行いました。

特に優秀な発表を行った参加者2名は、優秀賞と準優秀賞に選ばれました。優秀賞の高校生は、県内の6大学で実施されてきた講座の成果を一堂に会して披露し合う全体発表会で、代表としてプレゼンテーションを行います。

平成24年国際研究集会を開催

●大学院国際言語文化研究科

大学院国際言語文化研究科は、11月23日(金)から25日(土)までの3日間、文系総合館及び西尾市岩瀬文庫において、平成24年国際研究集会「フランス国立図書館蔵『酒飯論絵巻』を巡って」を開催しました。

これは、日本学術振興会国際研究集会助成により、「フランス国立図書館蔵『酒飯論絵巻』研究会」を総括する目



研究会の様子

的で企画されたものです。同研究会は、フランス人研究者を中心として2009年9月に創設され、本学に所属する研究者も創設以来携わっており、「日本物語絵写本研究会」としても活動しています。

美術史のみならず、中世文学、中世思想史などを専門とする研究者も多数参加し、聴衆は3日間で170名にのぼりました。また11月27日(火)には、東京の日仏会館において、「描かれた酒と米」と題して同研究集会の総括を行い、登録制にも関わらず50名以上の聴衆が集まり、活発な議論が行われました。

なお、同研究集会の報告書は、「アジア遊学」特集号(勉強出版)として出版される予定です。

また、日本物語絵写本研究会の研究プロジェクトの全体報告書も、日本及びフランスにおいて、2014年、2015年に続けて4冊の出版が企画されています。

第14回「まちとすまいの集い」を開催

●大学院環境学研究科、減災連携研究センター

大学院環境学研究科建築学教室及び減災連携研究センターは、12月8日(土)、環境総合館レクチャーホールにおいて、第14回「まちとすまいの集い」を開催しました。今回は「歴史に学ぶ安全安心なまちづくり」をテーマとし、120名を超える参加がありました。

名古屋では、今後の南海トラフ巨大地震に備えて安全か



会場の様子

つ安心なまちを形成するために、様々な検討が進められています。今回は、関東大震災後の帝都復興事業、清須越、広小路建設、濃尾地震、戦災復興事業等、検討を進めるにあたって参考とすべき歴史とその教訓を振り返りました。

まず、武村雅之減災連携研究センター教授が「関東大震災から見える江戸・東京の街の変化」と題して、安政江戸地震と関東地震の状況を概観した上で、関東大震災の教訓である耐震設計の必要性と安全な都市構造の構築について解説しました。続いて、西澤泰彦環境学研究科准教授が「災害の教訓と名古屋のまちづくり」と題して、清須越、広小路建設、濃尾地震、治水と利水、戦時体制と戦災復興における先人たちの工夫を紹介しました。次に、廣井 悠同センター准教授が「まちとすまいと人間」と題して、都市防災計画の歴史を概説した上で、避難場所の安全性と複合災害、事業所と進める大都市防災、自助の過大評価、被害の広域性といった今後の都市防災の課題を、人間に焦点を当てて提示しました。

その後、福和同センター長のコーディネートで、これからの名古屋のまちづくりの課題について、会場も交えた活発な議論が行われました。

国際研究集会「LHC から見る強結合ゲージ理論」を開催

●素粒子宇宙起源研究機構

素粒子宇宙起源研究機構は、12月4日(火)から7日(金)までの4日間、理学南館大講堂において、国際研究集会「LHC から見る強結合ゲージ理論」を開催しました。

同研究集会は、本学特別教授である益川素粒子宇宙起源研究機構長が代表を務める科学研究費基盤研究(S)採択プロジェクト「対称性の破れとゲージダイナミクス」の研究の一環として開催されたもので、2012年7月に欧州原子核研究機構(CERN)にある大型ハドロン衝突型加速器(LHC)で発見されたヒッグス粒子を、素粒子ではなく下部の強結合ゲージ理論の複合粒子と考える研究を中心に、

議論が進められました。

同様の研究は、本学などを中心に世界的に展開されてきましたが、特に益川機構長らのスケール不変なゲージ理論の研究に基づいて山脇幸一同機構特任教授らが提唱した模型「ウォーキング・テクニカラー」の被引用数が600を超えるなど、大きな注目を集めています。同機構は、この理論を計算機シミュレーションで確かめるため、2011年3月に専用の高性能計算機システム- φ (ファイ)-を導入して研究を進めてきましたが、今回の研究集会で、複合ヒッグス粒子(テクニ・ディラトン)に直結する研究成果を世界に先駆けて発表し、参加者に大きな感銘を与えました。

参加者は総勢90名で、海外からもトップクラスの研究者を多数含む約25名が参加しました。

同機構は、LHCの進展とともにより高精度な研究を遂行し、再度本学で同趣旨の会議を開催することを予定しています。



記念撮影

第12回遺伝子実験施設公開セミナーを開催

●遺伝子実験施設

遺伝子実験施設は、11月29日(木)、理学部南館大講堂において、第12回遺伝子実験施設公開セミナー「リアルタイムモニタリング、イメージング-個体レベルから原子レベルまで-」を開催しました。

はじめに、小内 清遺伝子実験施設研究員が「生物発光リアルタイムモニタリング」と題して、世界最大規模の生

物発光測定装置や、それを次世代シークエンサーと併用する最先端の研究手法について紹介しました。次に、戦略的創造研究推進事業・総括実施型研究(ERATO) 東山ライブホロニクスプロジェクト研究総括である東山哲也理学研究科教授が「ライブイメージングで植物生殖の謎に迫る」と題し、ライブイメージングと光細胞操作の技術を駆使して明らかにした、植物生殖や植物初期発生の最新の研究成果を紹介しました。

続いて、理化学研究所基幹研究所主任研究員である中野明彦東京大学理学系研究科教授が「超解像ライブイメージング：膜交通研究の新たなパラダイムをつくる」と題し、超解像度のライブイメージングによって明らかとなった、従来の教科書に書かれている概念を書き換える新しい膜交通の概念を紹介しました。最後に、内橋貴之金沢大学理工研究域数物科学系准教授が「高速原子間力顕微鏡でイメージングするタンパク質の一分子ダイナミクス」と題し、高速原子間力顕微鏡という特殊な顕微鏡を用いて観察した様々なタンパク質のダイナミクスを紹介しました。

会場には本学の教員及び学生、企業関係者、一般市民ら併せて75名を超える参加者があり、講演に熱心に耳を傾けていました。



講演する内橋准教授

統合物質創製化学推進事業第2回国際シンポジウムを開催

●物質科学国際研究センター

物質科学国際研究センターは、12月10日(月)、11日(火)の2日間、野依記念学術交流館において、統合物質創製化学推進事業第2回国際シンポジウムを開催しました。

同事業は、文部科学省特別経費により、平成22年度から27年度までの期間で、北海道大学触媒化学研究センター、京都大学化学研究所附属元素科学国際研究センター、九州



熱心に質問する参加者

大学先導物質化学研究所、本学同センターの4大学間が連携して推進するものです。綿密な事業計画に則り、毎年、共同研究の進捗状況を発表する国内シンポジウムと、海外からの講演者等を交えて最新の研究成果にふれる国際シンポジウムを開催しています。今回の同国際シンポジウムでは、海外から8名の講演者を招きました。

初めに、異物質科学国際研究センター長からあいさつがあり、初日は主に有機化学分野に関する講演が、2日目は無機化学分野に関する講演が行われました。国内外合わせて14名の招待講演者が最新の研究成果を発信し、88件のポスター発表が行われ、参加者は約250名にのぼりました。

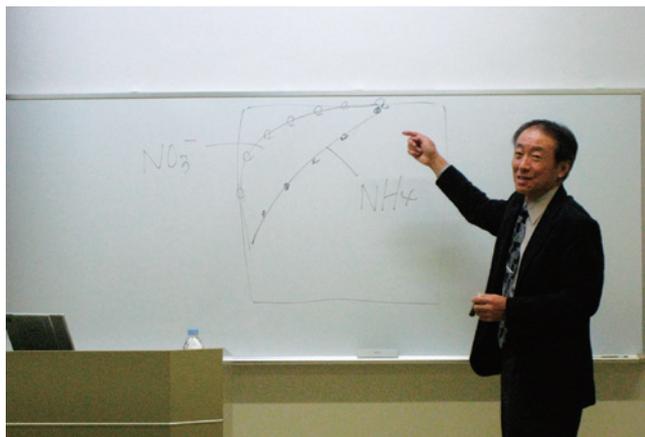
それぞれの講演の後の質疑応答では、参加者から講演者に対し熱のこもった質問が投げかけられ、終始白熱した雰囲気でした。

ICCAE 2012年度第4回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター(ICCAE)は、11月19日(月)、農学部第7講義室において、2012年度第4回オープンセミナーを開催しました。

今回は、鳥山和伸国際農林水産業研究センター(JIRCAS)生産環境・畜産領域長が「水田の硝化作用とイネの硝酸窒素栄養の可能性について」と題し、講演しました。



講演を行う鳥山領域長

イネは好アンモニア植物とされており、これまで、アンモニア栄養を中心として水稲の多収技術が確立されてきました。一方、1983年にマダガスカルで始まった稲作強化技術(SRI)が、次第に東南アジアやアフリカ等に広がってきています。

SRIは、播種後1週間から10日前後の稚苗を水田に疎植して分けつ(株わかれ)を促進し、多収を実現すると言われていた技術ですが、その増収の仕組みがまだ科学的に検証されていないことが問題となっています。

鳥山領域長は、アンモニアと硝酸で栽培したイネの生育量がアンモニアだけの場合より増加することに注目し、土壌を酸化的条件にコントロールできるSRI圃場の土壌では、微生物の働きによっておこる硝化作用によってアンモニアから生成される硝酸が多収をもたらしているのではないかと仮説を立てて研究しています。

硝酸でイネを育てることができれば、生育が促進され収量増加が期待されます。この仮説の検証には土壌肥料や作物生理、分子生理学などの異なる研究分野のさらなる研究が必要ですが、将来に夢を与える研究と言えます。セミナー参加者もこの点に注目し、深い議論が展開されました。

国際シンポジウム「法整備支援から法教育へ」を開催

●法政国際教育協力研究センター、大学院法学研究科

法政国際教育協力研究センター（CALE）及び大学院法学研究科は、12月8日（土）、9日（日）の2日間、理学南館大講堂において、国際シンポジウム「法整備支援から法教育へ—新たな地平の開拓—」を開催しました。今年、同研究科が法整備支援に関わる教育研究活動を開始して20年、そのための中核組織としてCALEが設立されてから



記念撮影

10年の節目の年にあたります。同シンポジウムは、この機会に、これまで築き上げてきた各国・各機関との緊密なネットワークを改めて確認し、活動を総括し、今後の発展につなげていくことを目的として開催されました。

シンポジウムは5部構成で、初日には、法整備支援という新たな学問領域と既存の法律学との相互作用を検討する「法整備支援と法律学」、法が継受国に根付くために不可欠な法学教育に光を当てた「アジアの市場経済移行国における法学教育支援に関する比較研究」の2つのセッションを通じ、法整備支援から法教育へというCALE及び同研究科のこれまでの取組みの成果と課題を論じました。2日目は、基本的漢字法概念を相互に比較検討できる標準対訳辞書の開発に焦点をあてた「東アジア漢字文化圏法令用語対訳辞書の開発」、グローバル化に対応する法学教育の在り方を論じる「法学教育の国際化の到達点と課題」、及び東アジアユス・コムーネ（共通法）形成の基盤となる法的・政治的認識共同体の人材育成を目指すキャンパスアジア事業の今後を検討する「キャンパスアジアから世界へ」の3つのセッションを行いました。

参加者は12カ国から延べ160名にも及び、活発な議論が行われました。

第7回、第8回次世代自動車公開シンポジウムを開催

●グリーンモビリティ連携研究センター

グリーンモビリティ連携研究センターは、11月28日（水）、11月30日（金）、ポートメッセなごやにおいて、名古屋国際見本市委員会との共催により、第7回、第8回次世代自動車公開シンポジウムをそれぞれ開催しました。これは、同委員会が主催した「次世代ものづくり基盤技術産業展—TECH Biz EXPO 2012—」の期間中に併催されたも



講演の様子

のです。

第7回では、「次世代電池技術の可能性と未来」をテーマとし、同センター客員教授である佐藤 登サムスンSDI株式会社常務取締役、同じく同センター客員教授である藤代芳伸産業技術総合研究所先進製造プロセス研究部門機能集積モジュール化研究グループ長、上野智永同センター助教から、次世代電池技術の最新の動向について講演がありました。

第8回では、「パワーデバイス技術が拓く次世代モビリティ」をテーマとし、同センター客員教授である亀井一人新日鐵住金株式会社先端技術研究所主幹研究員、佐野泰久大阪大学大学院工学研究科准教授、鶴田和弘株式会社デンソー 機能材料研究部SiCデバイス研究室長から、パワーデバイス技術の最新の動向について講演がありました。

両回とも、東海地域の企業、公益法人、大学の関係者など多くの参加者があり、熱心な質疑応答も行われ、新たな産学連携の芽を生み出す場となりました。

国際環境リーダー育成のための高等教育フォーラムを開催

●国際環境人材育成センター

国際環境人材育成センターは、11月22日(木)、野依記念学術交流館において、「国際環境リーダー育成のための高等教育フォーラム～アジア・アフリカにおける持続可能な開発を目指して～」を開催しました。

第1部では、2009年4月に学生の受け入れを開始した国際環境人材育成プログラム(NUGELP)の活動報



パネルディスカッションの様子

告及び国際環境リーダー育成の成果が発表されました。NUGELPはこれまでに51名の留学生を含む78名の修了生を輩出しており、修了生を代表して現在三菱重工業株式会社で勤務している前新将さん(2011年度修了)が、在校生を代表してマラウイ出身のクララ・リンビツ・チダモズィさんが、それぞれの経験を語りました。続いて、ミランダ・シュラーズ ベルリン自由大学環境政策研究所所長が、基調講演として日本とEUの気候変動政策を概観し、活発な質疑応答が行われました。

午後からの第2部では、入倉憲二名古屋市長、西岡誠治広島市整備局長、ファン・チヨン ソウル特別市気候変動政策官、及びインドネシアのトゥリ・リスマハリニスラバヤ市長から、各都市の先進的な環境の取り組みについて紹介があり、第3部では、藤原章正広島大学教授、ムハンディキ・ビクター・シホロ工学研究科インフラ技術開発・移転講座(NEXCO 中日本)寄附講座教授が加わり、NUGELPプログラムリーダーである森川高行環境学研究科教授の進行で、パネルディスカッションが行われました。

参加者は学内外から120名にのぼり、盛況でした。

第27回トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催

●附属図書館

附属図書館は、12月11日(火)、同館5階多目的室において、第27回友の会トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催しました。今回は、森 正夫本学名誉教授が「中国の生活マナー 今に生きる長幼・師弟の伝統」と題して講演し、学内外から27名の参加がありました。

講演では、中国における生活マナーのルーツが秦・漢の



会場の様子

時代に生まれた児童教育読物に見られると指摘し、特に儒教的修養の水準を試験し官僚に登用する宋代以降の科举制度と児童教育読物の作成との関連、明末清初における秩序意識の大きな変動、清代以降に多数の児童教育読物の新刊書が刊行されるに至った歴史的背景について説明がありました。

なかでも、清代から伝わる児童教育読物のひとつである「弟子規」を取り上げ、「序」「考」「弟」に出てくる原文を読みときながら、長幼の秩序のもつ広がりや師弟間の礼節・老年者のいたわりを考察しました。また、現在中国と愛知県で使用されている道德教育・生活指導の教科書における高齢者に対するいたわりに関する記述についても紹介されました。

参加者からは、「子どもの道德教育の大切さや現代の日本社会についても考えさせられることが多くあった」、「中国における幼時教育を種々の古典籍によって知り興味をもった」などの感想が寄せられました。

名古屋－延世大学間学術研究交流会 2012を開催

●大学院医学系研究科



集合写真

大学院医学系研究科は、11月23日(金)、大幸キャンパスにおいて、「名古屋－延世大学間学術研究交流会2012」を開催しました。韓国の延世大学から教員・大学院生32名を迎え、本学の教員・大学院生を含め全体で200名を超える参加があり、活発な意見交換が行われました。

交流会前日の22日(木)には、医学部附属病院の見学会及び歓迎会を行い、当日は、まず開会式典が挙行され、高橋医学系研究科長、榊原同研究科保健学統括専攻長、ヒー・ジョン・キム延世大学保健学部長からあいさつ及び大学紹介がありました。その後、看護学、放射線技術学、検査技術学、理学療法学、作業療法学の5分科会に分かれて53題の研究発表が行われ、夜には専攻別の交流会がもたれました。また24日(土)には個別交流が行われました。

同研究会は今回で3回目となり、大学院生の国際交流への意欲向上が見られるとともに、両大学間の緊密な人材交流が図られてきています。

クリニカル・インディケータに関する勉強会 を開催

●医学部附属病院



講演する小松副院長

医学部附属病院は、12月12日(水)、医系研究棟においてクリニカル・インディケータに関する勉強会を開催しました。

同院では、今年度からクリニカル・インディケータ(臨床指標)の検討が始まっています。今回の勉強会は、今後クリニカル・インディケータ策定の中核的存在になると思われる医療従事者を対象として行われ、91名が参加しました。

初めに松尾同院長から開会のあいさつがあった後、講師である小松康宏聖路加国際病院副院長より、「医療の質改善の哲学と方法論－国際標準を超えるために－」と題して、いち早く医療の質改善(Quality Improvement)に着手し、医療の質に関する指標(Quality Indicator)を策定した聖路加国際病院の具体的な取組状況について、講演がありました。

質疑応答では、参加者から各部署の実情に照らした質問が多数寄せられ、活発な意見交換が行われるなど、病院機能の更なる改善につながる有意義な勉強会になりました。

第22回 IHP トレーニング・コースを開催

●地球水循環研究センター



講義の様子

地球水循環研究センターは、11月18日(日)から12月1日(土)の間、同センターにおいて、第22回 IHP トレーニング・コースを開催しました。同研修は、ユネスコ国際水文学計画(IHP)への協力として京都大学防災研究所水資源環境研究センターと1年毎に交互で開催しているものであり、今回は「宇宙からの降水観測とその応用」をテーマとしました。

参加者は、ユネスコ ジャカルタ事務所より推薦された5名、国際協力機構の研修者3名、京都大学の留学生5名の計13名で、講義は慶応義塾大学の協力を得てウェブ配信も行いました。また、中日本航空株式会社を見学し、ユネスコ推薦の5名は京都大学でも講義を受けました。

なお、同研修は、宇宙航空研究開発機構、情報通信研究機構と、本学など4大学が共同で推進する「地球気候系の診断に関わるバーチャルラボラトリーの形成」プログラム、京都大学のグローバル COE プログラム「極端気象と適応社会の生存科学」からの支援を得て開催されました。

第84回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター



講演する浜口名誉教授

減災連携研究センターは、11月26日(月)、環境総合館レクチャーホールにおいて、第84回防災アカデミーを開催しました。

今回は、浜口博之東北大学名誉教授が「地方富士と富士山－静穏期の長い火山を対比的に見る」と題して講演し、約100名の参加がありました。

浜口教授からは、活火山の定義や火山の噴火予知の基礎知識をはじめとし、岩手山や磐梯山などの地方富士と富士山との違いについて、詳しく説明がありました。特に火山の噴火予知については、実際に岩手山での観測網の整備や前兆現象が観測された際に取り組んだ事例などの紹介がありました。

今後は宝永噴火以来300年間静穏している富士山の噴火予知に関して、長期ビジョンを持って粘り強く観測していく必要があると締めくりました。

第85回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター



講演する矢代教授

減災連携研究センターは、12月12日(水)、環境総合館レクチャーホールにおいて、第85回防災アカデミーを開催しました。

今回は、矢代晴実防衛大学校教授が「地震保険を考える」と題して講演し、約100名の参加がありました。

矢代教授からは、損害保険の一般原則をはじめとし、地震被害の保険化の困難性や地震保険が設立された歴史、現在の地震保険や被災者に対する国の制度について、詳しく説明がありました。また、日本の地震保険と海外の地震保険を比較し、それぞれの特徴や考え方を紹介しました。

最後に、生命保険と比べて保険料が低いにもかかわらず加入率が低い地震保険について、もっと加入者を増やし、皆で有事に備える必要があると締めくりました。

和式馬術供覧を開催

●博物館



演武の様子

博物館は、12月9日(日)、教育学部附属中・高等学校運動場において、同学校及び体育会和式馬術部との共催により、和式馬術供覧を開催しました。

当日は、風が強く冷え込んだにもかかわらず、114名の来観者があり、和式馬術部員による馬上武術、打鞠、流鏑馬等の演武のほか、同高等学校の弓道部員による遠的騎射も行われました。演武の後は、和種馬への体験乗馬の機会も設けられ、乗馬を体験した来観者は西洋馬との違いを実感したようでした。

同行事は平成18年より毎年実施されていますが、大学近隣住民の関心は高く、「来年もぜひ来たい」との声が多く寄せられました。

野外観察園秋の見学会を開催

●博物館



見学会の様子

博物館は、11月24日(土)、野外観察園において、秋の見学会を開催しました。

同園は、東山キャンパスの南西にある約4000m²の緑地で、全学の研究や教育用の植物を栽培するほか、草木の生態を観察できる「生きた展示場」となっています。今回は、ドングリをテーマに開催し、88名の参加がありました。

秋晴れの中、初めに同園の案内があり、続いて、参加者は講義のテーマに沿ってドングリを観察しました。園内にはブナ科の樹木であるドングリの木が約10種あります。参加者は、落ち葉の中に散らばるアベマキやコナラのドングリを拾いながらその構造を観察するとともに、ブナ科の植物の見分け方や生活史、豊凶年の理由等の説明に、熱心に聞き入っていました。

見学の後は、博物館で、同園にある植物のミクロの姿を走査型電子顕微鏡で観察しました。電子顕微鏡観察は、希望者多数のため抽選を行うほどの盛況でした。

観測知にふれるハンズオン・ギャラリーを開催

●博物館



植物標本を顕微鏡で観察する参加者

博物館は、12月15日(土)、同館講義室において、「観測知にふれるハンズオン・ギャラリー」を開催しました。これは、学術研究に用いる標本を研究者と会話しながら間近に観察して、博物標本への理解を深める社会教育活動です。

今回は、「観測知」というテーマのもと、標本を詳しく観察、計測することによって、標本の意義をより詳しく知るプロセスを体験しました。「植物とムシの関係をはかる」、「水中に適応した生物のかたち」、「破片から古代アンデスの土器形状をはかる」の3つの展示ユニットを設け、植物、昆虫、古生物、考古、人類学といった幅広い分野の標本を用意し、関連する研究を紹介しました。20名を超える参加者には小学校低学年から成人まで幅広い年齢層が含まれ、標本の身近な観察から生まれたさまざまな関心や質問に解説員が応えました。

なお同企画は、多様な展示標本と研究内容を紹介するため、東京大学総合研究博物館と共同で実施しています。

第47回博物館コンサートを開催

●博物館



コンサートの様子

博物館は、12月15日(土)、同館展示室において、第47回博物館コンサート「クリスマスコンサート～インカからの贈り物～」を開催しました。平成13年から行われている同企画には、Nagoya University Museum Concertの頭文字をとってNUMCo(ナムコ)の愛称がつけられていますが、これには、「名・夢・来」という意味も込められています。

今回は、名古屋を中心に活動するフォルクローレ(南米民族音楽)バンドであるティエラブランカにより、「花の虫」、「コンドルはとんでいく」、「チュラ」をはじめ全12曲が演奏されました。「イミリタイ」の演奏では、ティエラブランカの5名と観客307名が一体となり、館内に手拍子や歌声があふれました。また、南米民族衣装体験コーナーや楽器体験コーナーなど特設し、博物館らしいコンサートとなりました。

アンケートにも、「南米の風景が目につかんだ」、「本当に楽しんだ」等の声が寄せられ、非常に好評でした。

受賞者一覧

褒章関係

受章日	受章名	受章者の所属・職名	受章者	備考
H24.11. 3	瑞宝中授章	名誉教授	内山 晋	
H24.11. 3	瑞宝中授章	名誉教授	藤井 省三	
H24.11. 3	瑞宝中授章	名誉教授	太田 博	
H24.11. 3	瑞宝中授章	名誉教授	竹村 富男	
H24.11. 3	紫綬褒章	大学院情報科学研究科教授	村瀬 洋	
H24.11. 3	瑞宝双光章	元附属図書館事務部長	木本 明男	

教員

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H24. 5. 7	Best Conference Paper Award, IEEE Robotics and Automation Society IEEE International Conference on Robotics and Automation – ICRA2012	大学院工学研究科教授	新井 史人	
H24. 6.29	第14回放射線プロセスシンポジウムポスターセッション優秀賞	大学院医学系研究科教授	山本 誠一	
H24. 7.10	平成24年度天然物化学談話会奨励賞	大学院創薬科学研究科助教	下川 淳	
H24. 8. 2	第13回労働関係論文優秀賞	大学院経済学研究科准教授	江夏幾多郎	
H24. 8. 8	Best Paper Award 2012, Journal of Advanced Computational Intelligence and Intelligent Informatics	大学院工学研究科准教授	吉川 大弘	古橋武（大学院工学研究科教授）と連名
H24. 9. 1	平成24年度日本環境共生学会環境共生学術賞（奨励賞）	大学院環境学研究科助教	柴原 尚希	
H24. 9. 5	Chatterton Young Investigator Award	エコトピア科学研究所准教授	梶田 信	
H24. 9. 7	平成24年度日本家禽学会賞	大学院生命農学研究科准教授	村井 篤嗣	
H24. 9. 7	2012年度日本繁殖生物学会奨励賞	大学院生命農学研究科准教授	松田 二子	
H24. 9. 7	Poster Presentation Award, The Royal Society of Chemistr-Tokyo International Conference 2012	革新ナノバイオデバイス研究センター特任助教	小野島大介	馬場嘉信（大学院工学研究科教授）、加地範匡（大学院工学研究科准教授）と連名
H24. 9.10	日本機械学会 情報・知能・精密機器部門功績賞	大学院工学研究科教授	福澤 健二	
H24. 9.11	ヨウ素学会 第15回ヨウ素学会シンポジウムポスター賞	大学院工学研究科助教	ウヤヌクムハメット	
H24. 9.11	応用物理学会 フェロー表彰	大学院工学研究科教授	堀 勝	
H24. 9.11	電気学会 誘電・絶縁材料技術委員会学術貢献賞 家田賞	大学院工学研究科教授	鈴置 保雄	
H24. 9.13	第21回山本七平賞	名誉教授	川田 稔	
H24. 9.14	第24回日本植物形態学会平瀬賞	大学院理学研究科 ERATO 研究員	笠原竜四郎	他 5 名と連名
H24. 9.16	日本線維筋痛症学会第 4 回学術集会優秀演題賞	環境医学研究所助教	田口 徹	
H24. 9.18	第 5 回（2012年度）分子科学会奨励賞	大学院理学研究科助教	吉川 浩史	
H24. 9.19	Excellent Poster Presentation in the 3rd Asian-Pacific Conference on Ionic Liquids and Green Processes (APCIL '12)	エコトピア科学研究所助教	守谷 誠	余語利信（エコトピア科学研究所教授）、坂本 涉（エコトピア科学研究所准教授）、渡邊隆明（大学院工学研究科 M2）と連名
H24. 9.19	日本セラミックス協会 第25回秋季シンポジウム 特定セッション優秀発表賞	大学院工学研究科助教	豊浦 和明	
H24. 9.20	高分子学会 高分子学会旭化成賞	大学院工学研究科准教授	佐藤浩太郎	
H24. 9.20	日本分析化学会 奨励賞	革新ナノバイオデバイス研究センター特任講師	岡本 行広	
H24. 9.21	第31回日本癌学会奨励賞	高等研究院特任講師	島田 和之	
H24. 9.27	2012年度日本木材学会中部支部大会優秀発表賞	大学院生命農学研究科助教	松尾 美幸	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H24. 9.27	PRC Friendship Award of Liaoning Province, Liaoning Provincial People's Government	大学院工学研究科教授	福田 敏男	
H24. 9.28	Symposium Award for Encouragement of Research in Materials Science, IUMRS-ICEM2012	大学院理学研究科助教	岡崎 竜二	
H24. 9.30	第1回藤原洋数理科学賞大賞	大学院情報科学研究科教授	小澤 正直	
H24.10. 2	2012年度高エネルギー研究者会議奨励賞	大学院理学研究科研究員	松岡 広大	
H24.10. 3	日本磁気学会 学会活動貢献賞	大学院工学研究科准教授	加藤 剛志	
H24.10. 5	Plasma Science Award 11th APCPST & 25th SPSM	大学院工学研究科教授	堀 勝	石川健治（大学院工学研究科特任教授）、田中宏昌（大学院工学研究科研究員）と連名
H24.10.11	第13回分子磁性国際会議ポスター賞	物質科学国際研究センター 博士研究員	山田 哲也	守田貴太郎（大学院理学研究科 M1）、吉川浩史（大学院理学研究科助教）、阿波賀邦夫（物質科学国際研究センター教授）と連名
H24.10.15	平成24年度工業標準化事業（経済産業大臣）表彰	審議役	宮田 隆司	
H24.10.15	経済産業省 平成24年度工業標準化事業表彰 経済産業大臣表彰	大学院工学研究科教授	山田 陽滋	
H24.10.16	イギリス王立化学会フェロー	大学院理学研究科教授	伊丹健一郎	
H24.10.16	Novartis Chemistry Lectureship Award	大学院理学研究科教授	伊丹健一郎	
H24.10.19	2012年第1回日本神経精神薬理学会 学術奨励賞	医学部附属病院准教授	永井 拓	
H24.10.19	第74回日本血液学会奨励賞	医学部附属病院医員	鈴木 伸明	
H24.10.19	組込みシステムシンポジウム2012 優秀論文賞	大学院情報科学研究科 研究員	チェン ヤン	高田広章（大学院情報科学研究科教授）、倉知 亮（大学院情報科学研究科研究員）、曾 剛（大学院工学研究科講師）、他1名と連名
H24.10.21	第39回環境システム研究論文発表会 優秀ポスター賞	大学院環境学研究科教授	谷川 寛樹	
H24.10.22	CIGRE 特別会員表彰 Distinguished Member	大学院工学研究科教授	大久保 仁	
H24.10.25	第8回 Pfizer Ophthalmics Award Japan	大学院医学系研究科教授	寺崎 浩子	
H24.10.26	平成24年度持田記念学術賞	大学院理学研究科教授	松本 邦弘	
H24.10.26	プレストレストコンクリート工学会 第21回プレストレストコンクリートの発展に 関するシンポジウム 優秀講演賞	大学院工学研究科助教	上田 尚史	
H24.11. 3	地域安全学会 優秀発表賞（第30回 2012年度 地域安全学会 研究発表会 春季）	減災連携研究センター 准教授	廣井 悠	
H24.11. 7	2012年度大気化学研究会奨励賞	大学院環境学研究科准教授	須藤 健悟	
H24.11. 7	Best Poster Award, IEEE MHS 2012 International Symposium on Micro-NanoMechatronics and Human Science	大学院工学研究科教授	福田 敏男	池田誠一（大学院工学研究科非常勤研究員）と連名
H24.11. 7	Best Paper Award, IEEE MHS 2012 International Symposium on Micro-NanoMechatronics and Human Science	大学院工学研究科教授	福田 敏男	中島正博（大学院工学研究科助教）、田島寛隆（大学院工学研究科特任助教）、中西直哉（大学院工学研究科 M1）と連名
H24.11. 7	Best Paper Award, IEEE MHS 2012 International Symposium on Micro-NanoMechatronics and Human Science	大学院工学研究科特任講師	市川 明彦	新井史人（大学院工学研究科教授） 佐久間臣耶（大学院工学研究科 D2）と連名
H24.11. 8	平成24年度放射線安全取扱部会年次大会 最優秀ポスター賞	大学院医学系研究科助教	緒方 良至	
H24.11. 8	Young Scientist Travel Awards, AsBIC-VI	物質科学国際研究センター 博士研究員	川上 了史	
H24.11.13	第34回サントリー学芸賞（政治・経済部門）	大学院環境学研究科教授	井口 治夫	
H24.11.13	平成24年度（2012年度）溶液化学研究会奨励賞	大学院理学研究科助教	横川 大輔	
H24.11.16	第1回（平成24年度）名古屋大学石田賞	大学院文学研究科准教授	梶原 義実	
H24.11.16	芸術科学会論文賞	大学院情報科学研究科教授	安田 孝美	他4名と連名

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H24.11.17	第21回 Pneumo Forum 特別賞	医学部附属病院助教	橋本 直純	長谷川好規（大学院医学系研究科教授）、横井香平（大学院医学系研究科准教授）、他8名と連名
H24.11.17	日本機械学会 第90期（2012年度）流体工学部門賞	大学院工学研究科教授	新美 智秀	
H24.11.17	第39回日本臓器保存生物医学会 会長賞	革新ナノバイオデバイス研究センター特任講師	湯川 博	
H24.11.19	Best Poster Award, The Seventh International Forum on Chemistry of Functional Organic Chemicals (IFOC-7)	物質科学国際研究センター助教	齊藤 尚平	ドウチュアンドン（物質科学国際研究センター研究員）、松尾恭平（大学院理学研究科 M2）、山口茂弘（物質科学国際研究センター教授）と連名
H24.11.29	日本粉体工業技術協会 国際粉体工業展東京2012 粉の広場アカデミックコーナー研究奨励賞	大学院工学研究科助教	森 隆昌	
H24.12. 1	国際開発学会研究奨励賞（2012年）	大学院国際開発研究科准教授	山田 肖子	
H24.12. 6	日本燃焼学会 第50回燃焼シンポジウムベストプレゼンテーション賞	大学院工学研究科教授	山下 博史	
H24.12. 8	第10回腎と高血圧 Update 研究奨励賞 優秀賞	医学部附属病院医員	佐藤 由香	
H24.12.12	有機合成化学協会旭化成ファーマ研究企画賞	物質科学国際研究センター助教	瀬川 泰知	

事務職員・技術職員

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H24.11.22	医学教育等関係業務功労者表彰	医学部附属病院看護部看護師	川野 順子	
H24.11.22	医学教育等関係業務功労者表彰	医学部附属病院医療技術部リハビリテーション部門理学療法士	佐藤 幸治	

学生

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H24. 3. 2	The University of Tokyo Global Center of Excellence for Mechanical Systems Innovation 4th GMSI International Symposium Best Poster Presentation	大学院工学研究科 D1	佐久間臣耶	
H24. 3.17	第62回日本木材学会優秀ポスター賞	大学院生命農学研究科 M2	平出 秀人	吉田正人（大学院生命農学研究科准教授）、山本浩之（大学院生命農学研究科教授）、他2名と連名
H24. 5.10	平成24年度電子情報通信学会ソフトウェアサイエンス研究会 研究奨励賞	大学院情報科学研究科 M2	中島 崇	結縁祥治（大学院情報科学研究科教授）と連名
H24. 5.26	第7回情報危機管理コンテスト 経済産業大臣賞	大学院情報科学研究科 M2	鐘 揚	青山桃子（大学院情報科学研究科 M2）、長谷川皓一（大学院情報科学研究科 M1）、廣野壮志（工学部4年）と連名
H24. 5.28	応用物理学会 第32回（2012年春季）応用物理学会講演奨励賞	大学院工学研究科 D2	鈴木 俊哉	堀 勝（大学院工学研究科教授）、石川健治（大学院工学研究科特任教授）、関根 誠（大学院工学研究科特任教授）、近藤博基（工学研究科准教授）、竹田圭吾（大学院工学研究科助教）と連名
H24. 5.28	日本機械学会 若手優秀講演フェロー賞 ロボティクス・メカトロニクス部門 ロボティクス・メカトロニクス講演会2011	大学院工学研究科 M2	大脇 浩史	
H24. 5.28	日本機械学会 ROBOMECH 表彰 ロボティクス・メカトロニクス部門 ロボティクス・メカトロニクス講演会2011	大学院工学研究科 D2	佐久間臣耶	
H24. 6. 7	第17回日本血栓止血学会学術奨励賞	大学院医学系研究科 D3	鈴木 敦夫	
H24. 6. 9	第34回日本血栓止血学会学術集会 優秀ポスター賞	大学院医学系研究科 M2	村田 萌	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H24. 7. 1	日本生物工学会 セルプロセス計測評価研究部会 第4回若手研究シンポジウム 若手研究奨励賞	大学院工学研究科 D1	佐々木寛人	
H24. 7. 6	第34回コンクリート工学講演会 年次論文奨励賞	大学院環境学研究科 D3	中村 聡宏	
H24. 7. 6	第34回コンクリート工学講演会 年次論文奨励賞	大学院環境学研究科 M1	西岡由紀子	
H24. 7. 6	第34回コンクリート工学講演会 年次論文奨励賞	大学院環境学研究科 M1	大西 歩	
H24. 7. 6	第34回コンクリート工学講演会 年次論文奨励賞	大学院環境学研究科 M1	篠野 宏	
H24. 7. 7	日本薬学会 第58回日本薬学会東海支部大会 大学院生フォーラム 発表賞	大学院工学研究科 D1	佐々木寛人	
H24. 7.26	2012年度包括型脳科学研究推進支援ネットワーク夏のワークショップ 若手優秀発表賞	大学院生命農学研究科 M2	羽根 正弥	
H24. 7.31	第66回セメント技術大会 優秀講演者賞	大学院環境学研究科 M1	篠野 宏	
H24. 8. 5	第31回日本医用画像工学会 (JAMIT2012) 大会賞	大学院情報科学研究科 M2	水藤 倫彰	
H24. 8.25	触媒学会 西日本支部 第6回触媒道場 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M2	佐藤 拓馬	
H24. 8.25	触媒学会 西日本支部 第6回触媒道場 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M1	大方 裕衣	
H24. 9. 1	平成24年度植物感染生理談話会 ポスター賞	大学院生命農学研究科 D3	間瀬 圭介	
H24. 9. 1	第23回日本末梢神経学会学術集会 最優秀発表賞	大学院医学系研究科 M1	後藤 沙絵	
H24. 9. 1	高分子学会 東海支部 東海高分子研究会 講演会2012年 学生研究奨励賞	大学院工学研究科 M2	永島 悠樹	
H24. 9. 1	高分子学会 東海支部 東海高分子研究会 講演会2012年 学生研究奨励賞	大学院工学研究科 M1	別府功一郎	
H24. 9. 3	第18回創発システムシンポジウム 優秀ポスター賞	大学院情報科学研究科 M2	伊藤 孝	有田隆也 (大学院情報科学研究科教授)、鈴木麗壘 (大学院情報科学研究科准教授)、他1名と連名
H24. 9. 3	第18回創発システムシンポジウム 優秀ポスター賞	大学院情報科学研究科 M1	西本 恵太	有田隆也 (大学院情報科学研究科教授)、鈴木麗壘 (大学院情報科学研究科准教授)、他2名と連名
H24. 9. 6	フラーレン・ナノチューブ・グラフェン学会 第6回若手奨励賞	大学院理学研究科 M2	中村 俊也	
H24. 9. 7	第30回レーザセンシングシンポジウム レーザ・レーダ研究会 廣野賞	大学院環境学研究科 D2	神 慶孝	
H24. 9. 7	有機合成化学協会 第29回有機合成化学セミナー ポスター賞	大学院工学研究科 D3	安井 猛	
H24. 9.10	日本機械学会機素潤滑設計部門 卒業研究コンテスト 最優秀発表	大学院工学研究科 M1	炭竈 美穂	
H24. 9.10	日本機械学会機素潤滑設計部門 卒業研究コンテスト 最優秀発表	大学院工学研究科 M1	八木 雄治	
H24. 9.10	日本機械学会機素潤滑設計部門 卒業研究コンテスト 優秀発表	大学院工学研究科 M1	北爪 一考	
H24. 9.11	第32回 (2012年春季) 応用物理学会 講演奨励賞	大学院工学研究科 M2	野崎 裕人	
H24. 9.12	2012年日本建築学会優秀卒業論文賞	大学院環境学研究科 M1	篠野 宏	
H24. 9.13	環境科学会2012年会 ポスドクおよび博士課程学生の部 優秀発表賞 (富士電気賞)	大学院環境学研究科 D3	奥岡桂次郎	
H24. 9.13	光化学協会 2012年光化学討論会 優秀学生発表賞	大学院工学研究科 D3	加藤 智博	
H24. 9.13	日本神経回路学会 第22回全国大会 大会奨励賞	大学院工学研究科 D2	東郷 俊太	
H24. 9.14	平成24年度土木学会 地球環境論文賞	大学院環境学研究科 研究生	森本 涼子	柴原尚希 (大学院環境学研究科助教)、加藤博和 (大学院環境学研究科准教授)、他1名と連名

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H24. 9.15	2012年度日本海洋学会秋季大会 ベストポスター賞	大学院環境学研究科 D1	ワン シェンチアン	
H24. 9.15	2012年度日本地質学会 研究奨励賞	大学院環境学研究科 D3	森 宏	
H24. 9.16	日本鳥学会2012年度大会ポスター発表優秀賞	大学院生命農学研究科 M1	近藤 崇	
H24. 9.19	第31回日本医用画像工学会大会 (JAMIT2012) 大会奨励賞	大学院医学系研究科 M1	高瀬 郁子	
H24. 9.19	第31回日本医用画像工学会大会 (JAMIT2012) 大会奨励賞	大学院情報科学研究科 M1	松崎 哲朗	小田昌宏 (大学院情報科学研究科助教)、 森 健策 (情報連携統括本部教授)、 他2名と連名
H24. 9.20	日本音響学会春季研究発表会学生優秀発表賞	大学院情報科学研究科 M2	江崎 知	
H24. 9.20	日本セラミックス協会 第25回秋季シンポジウム 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M1	鈴木健太郎	
H24. 9.20	化学工学会 分離プロセス部会 分離プロセス部会賞	大学院工学研究科 M2	馬 文静	
H24. 9.20	日本セラミックス協会 第25回秋季シンポジウム 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M1	鈴木健太郎	長谷川正 (大学院工学研究科教授)、 草場啓治 (大学院工学研究科准教授)、 丹羽 健 (大学院工学研究科助教)と連名
H24. 9.21	第23回基礎有機化学討論会 ポスター賞	大学院理学研究科 M2	松尾 恭平	齊藤尚平 (物質科学国際研究センター助教)、 山口茂弘 (物質科学国際研究センター教授) と連名
H24. 9.21	日本物理学会2012年秋季大会 領域2 学生優秀発表賞	大学院理学研究科 D3	畑 昌育	
H24. 9.21	高分子学会 高分子ゲル研究会 ゲルワーク ショップ イン 名古屋 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M1	江崎 健太	
H24. 9.26	日本雪氷学会 2012年雪氷研究大会 VIP (Very Impressive Presentation) 賞 優秀発表賞	大学院環境学研究科 D3	保科 優	
H24. 9.27	日本雪氷学会 2012年雪氷研究大会 学生奨励賞 最優秀賞	大学院環境学研究科 M2	横山 知佳	
H24. 9.27	2012年度日本木材学会中部支部大会 優秀発表賞	大学院生命農学研究科 D3	鳥羽 景介	山本浩之 (大学院生命農学研究科教授)、 吉田正人 (大学院生命農学研究科准教授) と連名
H24. 9.28	Young Scientist Award (Silver Award), IUMRS International Conference on Electronic Materials 2012	大学院工学研究科 M2	浅野 孝典	
H24. 9.29	スケジューリング学会 奨励賞	大学院情報科学研究科 M2	小木曾由明	
H24.10. 2	高エネルギー研究者会議 奨励賞	大学院理学研究科 D3	奥村 恭幸	
H24.10. 8	Japan Chapter Young Award, IEEE Robotics and Automation Society (IROS2012)	大学院工学研究科 M2	大脇 浩史	
H24.10.10	Summer Training 2012 at University of Michigan Excellence Award, Japan-US Advanced Collaborative Education Program (JUACEP)	大学院工学研究科 M1	呉 瓊	
H24.10.12	平成24年度錯体化学会 第62回討論会 学生講演賞	大学院理学研究科 M1	三原のぞみ	
H24.10.14	日本航空宇宙学会 第8回全日本学生室内飛行ロボットコンテスト 名古屋市長賞	大学院工学研究科・工学部	NAVIX α	青野正寛 (大学院工学研究科 M2)、 佐々木洸 (大学院工学研究科 M2)、 波多野高斗 (大学院工学研究科 M2)、 福岡敬介 (大学院工学研究科 M1)、 堀 雄一 (工学部4年)と連名
H24.10.14	日本航空宇宙学会 第8回全日本学生室内飛行ロボットコンテスト 自動制御賞 (多摩川精機賞)	大学院工学研究科・工学部	NAVIX α	青野正寛 (大学院工学研究科 M2)、 佐々木洸 (大学院工学研究科 M2)、 波多野高斗 (大学院工学研究科 M2)、 福岡敬介 (大学院工学研究科 M1)、 堀 雄一 (工学部4年)と連名
H24.10.15	第22回日本 MRS 学術シンポジウム 奨励賞	大学院工学研究科 M1	森下 哲典	
H24.10.17	第59回有機金属化学討論会 ポスター賞	大学院理学研究科 M2	武藤 慶	
H24.10.20	第74回日本血液学会学術集会 優秀ポスター賞	大学院医学系研究科 M2	奥山恵理子	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H24.10.23	日本生物工学会 第1回 生物工学学生優秀賞 (飛翔賞)	大学院工学研究科 D1	佐々木寛人	
H24.10.26	日本作物学会 第234回講演会 優秀発表賞 (口頭部門)	大学院生命農学研究科 D1	大井 崇生	
H24.10.26	日本作物学会 第234回講演会 優秀発表賞 (ポスター部門)	農学部 4年	塚口 駿貴	
H24.10.27	東海体育学会第60回大会賞 学生の部 最優秀賞	大学院教育発達科学研究科 D3	井上功一郎	布目寛幸 (総合保健体育科学センター准教授)、 池上康男 (総合保健体育科学センター教授)と 連名
H24.10.27	東海体育学会第60回大会賞 学生の部 優秀賞	大学院教育発達科学研究科 D3	佐藤菜穂子	布目寛幸 (総合保健体育科学センター准教授)、 池上康男 (総合保健体育科学センター教授)と 連名
H24.10.28	日本教育行政学会研究奨励賞	大学院教育発達科学研究科 D3	杉浦由香里	
H24.11. 2	日本測地学会 第118回 学生優秀発表賞	大学院環境学研究科 D1	篠島 僚平	
H24.11. 6	第2回CSJ化学フェスタ2012 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M2	渡邊 隆明	
H24.11. 6	日本航空宇宙学会 第50回飛行機シンポジウム 学生優秀講演賞	大学院工学研究科 M1	福岡 敬介	
H24.11. 6	日本化学会 日本化学会-秋季事業 第2回 CSJ化学フェスタ2012 最優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 D2	中谷 裕次	
H24.11. 6	日本化学会 日本化学会-秋季事業 第2回 CSJ化学フェスタ2012 最優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 M1	赤羽真理子	
H24.11. 6	日本化学会 日本化学会-秋季事業 第2回 CSJ化学フェスタ2012 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 D2	山口 龍一	
H24.11. 6	日本化学会 日本化学会-秋季事業 第2回 CSJ化学フェスタ2012 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 D2	岩花宗一郎	
H24.11. 6	日本化学会 日本化学会-秋季事業 第2回 CSJ化学フェスタ2012 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 M2	手島 翠	
H24.11. 6	日本化学会 日本化学会-秋季事業 第2回 CSJ化学フェスタ2012 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 M1	住田 栄佑	
H24.11. 6	日本化学会 日本化学会-秋季事業 第2回 CSJ化学フェスタ2012 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 M1	水谷 真夕	
H24.11. 6	日本化学会 日本化学会-秋季事業 第2回 CSJ化学フェスタ2012 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 M1	鈴木 慎也	
H24.11. 6	日本化学会 日本化学会-秋季事業 第2回 CSJ化学フェスタ2012 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 M1	江崎 健太	
H24.11. 6	日本化学会 日本化学会-秋季事業 第2回 CSJ化学フェスタ2012 優秀ポスター発表賞	大学院理学研究科 D1	西本 佳央	
H24.11. 7	第18回大気化学討論会 学生・若手ポスター賞	大学院理学研究科 M1	宮道 光平	大内麻衣 (大学院理学研究科 D1)、 中山智喜 (太陽地球環境研究所助教)、 松見 豊 (太陽地球環境研究所教授)、 他3名と連名
H24.11. 7	Best Poster Presentation of The 3rd International Symposium on Advanced Materials Development and Integration of Novel Structured Metallic and Inorganic Materials (AMD1-3)	大学院工学研究科 M2	星野 辰夫	余語利信 (エコトピア科学研究所教授)、 坂本 渉 (エコトピア科学研究所准教授)、 守谷 誠 (エコトピア科学研究所助教)、 服部将朋 (エコトピア科学研究所特任助教) と連名
H24.11. 7	Best Paper Award, IEEE 2012 International Symposium on Micro-Nano Mechatronics and Human Science (MHS2012)	大学院工学研究科 M1	新美 京	新井史人 (大学院工学研究科教授)、 益田泰輔 (大学院工学研究科特任助教)と 連名
H24.11.13	第35回溶液化学シンポジウムポスター賞	大学院理学研究科 M2	臼井 孝介	
H24.11.17	人文地理学会賞 (論文部門)	大学院環境学研究科 D3	服部垂由未	
H24.11.17	Outstanding Poster Presentation Award for Young Scientist in 2012, ISNAC2012 39th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry	大学院工学研究科 D3	加藤 智博	
H24.11.19	情報処理学会データベースシステム研究会 学生奨励賞	大学院工学研究科 M2	正井 宏明	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H24.11.20	応用物理学会 第33回(2012年秋季) 応用物理学会 講演奨励賞	大学院工学研究科 D1	堤 隆嘉	堀 勝(大学院工学研究科教授)、石川健治(大学院工学研究科特任教授)、関根 誠(大学院工学研究科特任教授)、近藤博基(大学院工学研究科准教授)、竹田圭吾(大学院工学研究科助教)と連名
H24.11.22	日本金属学会・日本鉄鋼協会東海支部 第22回学生による材料フォーラム 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M1	内田 圭	
H24.11.28	有機合成化学協会東海支部 第43回中部化学関係学協会支部連合秋季大会 特別討論会 VIP 賞	大学院工学研究科 M2	林 裕樹	
H24.11.28	有機合成化学協会東海支部 第43回中部化学関係学協会支部連合秋季大会 有機化学一般研究発表 優秀賞	大学院工学研究科 M2	小倉 義浩	
H24.11.30	第5回臭素化学懇話会 2012ハロゲン利用ミニシンポジウム ポスター賞	大学院工学研究科 D1	澤村 泰弘	
H24.11.30	日本航空宇宙学会 第49回中部・関西支部合同秋期大会 中部支部長賞	大学院工学研究科 M2	市原 大輔	佐宗章弘(大学院工学研究科教授)、横田 茂(大学院工学研究科助教)、原田翔太(大学院工学研究科 M1)、と連名
H24.11.30	日本航空宇宙学会 第49回中部・関西支部合同秋期大会 最優秀学生賞	大学院工学研究科 M1	大野 翔也	長野方星(大学院工学研究科准教授)と連名
H24.12. 1	公益社団法人 日本セラミックス協会 東海支部学術研究発表会 優秀講演賞	大学院工学研究科 M1	市川 大樹	
H24.12. 4	環境情報科学ポスターセッション 学生の部 理事長賞	工学部 4年	岡崎奈津子	奥岡桂次郎(大学院環境学研究科 D3)、韓 驥(大学院環境学研究科助教)、谷川寛樹(大学院環境学研究科教授)、白川博章(大学院環境学研究科准教授)と連名
H24.12.10	平成24年度表面技術協会若手研究者・技術者研究交流発表会 若手奨励賞	大学院工学研究科 M2	定末 佳祐	
H24.12.10	高分子学会 第43回中部化学関係学協会支部連合秋季大会 東海高分子優秀学生発表賞	大学院工学研究科 M2	内山 峰人	
H24.12.12	日本音響学会東海支部優秀発表賞	大学院情報科学研究科 M2	安藤 厚志	
H24.12.12	日本音響学会東海支部優秀発表賞	大学院情報科学研究科 M2	水野 雄介	
H24.12.15	第6回有機π電子系シンポジウム ポスター賞	大学院理学研究科 M1	白井 秀典	櫛田知克(大学院理学研究科 D3)、山口茂弘(物質科学国際研究センター教授)と連名

*受賞者の所属・職名又は学年は、受賞当時

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
1 新井史人工学研究科教授などは卵子から細胞核を効率的に採取するマイクロ流体チップを開発	11.16 (金)	日刊工業
2 経済学部学生向け講演会開催：15日 名古屋国税局長百嶋 計氏が講演	11.16 (金)	読売 中日 (朝刊)
3 愛知(ここ)に人あり：「大好き」といっしょ ^⑨ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	11.16 (金)	朝日 (朝刊)
4 数理ウェブ開催：24日 大沢健夫多元数理科学研究科教授と伊師英之同准教授が講演	11.16 (金)	中日 (朝刊)
5 名大カフェ “Science, and Me” 第28回「未来の医療ロボットを創る！ーバイオニックな視点からみた最先端技術の紹介ー」開催：21日 新井史人工学研究科教授の講演	11.16 (金)	読売
6 堀 克敏工学研究科教授が微生物をガラス等の表面にくっつける繊維たんぱく質を発見	11.16 (金)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
	11.21 (水)	日刊工業
7 平成24年度医学教育等関係業務功労者文部科学大臣表彰：川野順子医学部附属病院看護師、佐藤幸治同理学療法士	11.17 (土)	読売
8 あいち現場考：野依良治本学特別教授、飯島澄男同特別招へい教授、高橋雅英医学系研究科教授の発言が紹介される	11.17 (土)	中日 (朝刊)
9 愛知(ここ)に人あり：「大好き」といっしょ ^⑩ 作家で椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生	11.17 (土)	朝日 (朝刊)
10 現代日本誤百科 (713)：「行方をくらませた」町田 健文学研究科教授	11.19 (月)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
11 本学のサークル民族舞踊団音舞が野外講演でソーラン節や八丈島太鼓などの演目を披露し12月16日開催の定期公演をPR	11.19 (月)	中日 (朝刊)
12 第51回東海学生サッカーリーグ戦：サッカー部が9位	11.19 (月)	朝日 (朝刊)
13 長野方星工学研究科准教授などは炭素繊維強化プラスチックの熱伝導性を触れずに測る装置を開発	11.20 (火)	日刊工業
14 現代日本誤百科 (714)：「思わずハッとしたり」町田 健文学研究科教授	11.20 (火)	中日 (朝刊)
15 国際環境リーダー育成のための高等教育フォーラムーアジア・アフリカにおける持続可能な開発を目指してー開催：22日 基調講演 ドイツのベルリン自由大学教授ミランダ・シュラズ氏	11.20 (火)	中日 (朝刊)
16 研究現場発：SiC 高品質結晶の開発 宇治原 徹工学研究科教授	11.20 (火)	中部経済新聞
17 現代日本誤百科 (715)：日本の「スポーツは底上げしている」町田 健文学研究科教授	11.21 (水)	中日 (朝刊)
18 日経 BP コンサルティング「大学ブランド・イメージ調査2012-2013 (北陸・東海編)」で本学が1位となる	11.21 (水)	日経 (朝刊)
19 鈴木謙三記念医科学応用研究財団助成金贈呈式開催：29日 室原豊明医学系研究科教授が講演	11.21 (水)	中日 (朝刊)
20 第25回博物館企画展「なんじゃ?もんじゃ? 高木典雄とコケの世界」開催：11月23日～2月2日	11.21 (水) 11.28 (水) 12. 5 (水) 12.12 (水)	朝日 (夕刊) 朝日 (夕刊) 朝日 (夕刊) 朝日 (夕刊)
21 読売ビジネスサロン開催：21日 濱口総長が基調講演し「英語プラスワン」の教育の必要性を強調	11.22 (木)	読売
22 現代日本誤百科 (716)：「変わった奇特」な人 町田 健文学研究科教授	11.22 (木)	中日 (朝刊)
23 教養教育院プロジェクトギャラリー clas 展示会「designVision」開催：23～30日 情報科学研究科大学院生が23年前のインテリアを集めた展示会を主催	11.22 (木)	中日 (朝刊)
24 第26回 spcafé「物理学と情報科学の融和」開催：29日 分子科学研究所特任准教授鹿野 豊氏が講演	11.22 (木)	中日 (朝刊)
25 川合伸幸情報科学研究科准教授は能面が舞台で幽玄な表情を見せる謎を解明	11.22 (木)	中日 (夕刊)
26 大平英樹環境学研究科教授は「機械の操縦は私たちの自我の意識をも拡張する」と語る	11.22 (木)	朝日 (夕刊)
27 生命農学研究科附属フィールド科学教育研究センター 設楽フィールドが来年の3月で家畜類の飼育を終了	11.23 (金)	中日 (朝刊)
28 本学が2013年度の学生募集要項を発表	11.23 (金)	中日 (朝刊)
29 家森信善経済学研究科教授は金融円滑化法などの政策の終了はやむを得ないと語る	11.24 (土)	読売
30 2012年度中部経済学インターゼミ開催：24日 経済学部柳原ゼミ、根本ゼミが参加	11.25 (日)	中日 (朝刊)
31 現代日本誤百科 (717)：「カリスマ的大ヒット」町田 健文学研究科教授	11.26 (月)	中日 (朝刊)
32 The Center of Technologyーものづくり中部の明日を考えるーシンポジウム開催：4日 鈴置保雄工学研究科教授がパネルディスカッションに参加	11.26 (月)	中日 (朝刊)
33 乱流総選挙：リベラルは消えたのか 後 房雄法学研究科教授のインタビュー	11.27 (火)	朝日 (朝刊)
34 公益財団法人天田財団2012年度助成：一般研究開発助成レーザープロセッシング 北 英紀工学研究科教授、国際会議等開催準備助成塑性加工 社本英二工学研究科教授	11.27 (火)	日刊工業
35 2012年度東海学生アーチェリーインドア選手権大会：25日 山本真也さん本学学生 男子個人の部1位、寺嶋 南さん本学学生 女子個人の部1位、団体の部2位	11.27 (火)	読売
36 訃報：高桑康雄本学名誉教授	11.27 (火)	中日 (朝刊) 他2社
37 駐中国大使丹羽宇一郎氏本学卒業生が離任会見	11.27 (火)	読売 他3社
38 作家で福山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生がトークショーに出席	11.27 (火)	朝日 (朝刊)
39 第4回中部の未来を考える会開催：26日 林 良嗣環境学研究科教授がパネルディスカッションのコーディネータを務める	11.27 (木) 12. 1 (土)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
40 現代日本誤百科 (718)：少年たちの「思いを踏みつける」町田 健文学研究科教授	11.28 (水)	中日 (朝刊)
41 総務省はICT スマートタウンの実証実験の候補地に本学ほかを実験を担当する豊田市など5都市を選定	11.28 (水)	読売
42 現代日本誤百科 (719)：今日「歴史が変わる」町田 健文学研究科教授	11.29 (木)	中日 (朝刊)
43 野依良治本学特別教授と小林 誠同特別教授がスウェーデン大使主催の山中伸弥教授をたたえる祝賀会に出席	11.29 (木)	中日 (朝刊) 他2社
44 スポーツ人物館大学スポーツ編：夢の舞台へ駆け上がる 鈴木亜由子さん経済学部3年生	11.29 (木)	朝日 (夕刊)
45 上田 実医学系研究科教授、片桐 涉医学部附属病院助教などのチームは幹細胞培養液を用いたイヌの歯周病の再生治療に成功	11.30 (金)	中日 (朝刊) 他2社
46 地球水循環研究センター長に石坂丞二同教授を選出	11.30 (金)	中日 (朝刊) 他2社
47 第19回名古屋地理学会・岐阜地理学会合同シンポジウム「市民から見た地理の楽しみ方」開催：12月1日	11.30 (金)	読売

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
48 株式会社共立総合研究所取締役副社長江口 忍氏本学卒業生がリニア中央新幹線開業における名古屋のメリットについて語る	11.30 (金)	毎日 (朝刊)
49 ニッポン人・脈・記：民主主義 ここから8 東京大学教授安富 歩氏元本学助教授	11.30 (金)	朝日 (夕刊)
50 医学部附属病院は重症心不全の患者の心機能を体外式人工心臓で回復させることに成功	11.30 (金) 12. 1 (土)	中日 (夕刊) 中日 (朝刊) 他2社
51 私の視点：永石雅史環境学研究科特任教授	12. 1 (土)	朝日 (朝刊)
52 経済課題を聞く：12衆院選④ 生源寺眞一生命農学研究科教授	12. 2 (日)	読売
53 病院の実力：心臓病 医学部附属病院の実績が紹介される	12. 2 (日)	読売
54 国立天文台野辺山太陽電波観測所の太陽電波望遠鏡の運用終了について本学で開催された国際シンポジウムで運用を継続してほしいとの声上がる	12. 2 (日)	中日 (朝刊)
55 サッカー東海学生入れ替え戦第2戦 本学は3-3で富士常葉大学に引き分け 第1戦を2-1で勝利した本学が1部残留	12. 2 (日)	朝日 (朝刊)
56 現代日本誤百科 (720)：「他とは異彩」を放つ 町田 健文学研究科教授	12. 3 (月)	中日 (朝刊)
57 名古屋国際関係合同ゼミナールが開かれ本学のゼミが参加	12. 3 (月)	中日 (朝刊)
58 医学部附属病院でMRSAに院内感染した新生児が死亡し NICU・GCUの新規入院を一時中止	12. 3 (月) 12. 4 (火)	朝日 (夕刊) 他2社 読売 他3社
59 現代日本誤百科 (721)：「脂肪分が気になりがち」の方 町田 健文学研究科教授	12. 4 (火)	中日 (朝刊)
60 和式馬術部供覧開催：9日 教育学部附属中・高等学校運動場にて流鏝馬などを行う	12. 4 (火)	中日 (朝刊)
61 医学部附属病院で新生児がMRSAに感染し死亡した問題について、国公立大病院感染対策協議会は防止を徹底する目標を提示	12. 5 (水)	中日 (朝刊)
62 現代日本誤百科 (722)：「髪がやせて」いく 町田 健文学研究科教授	12. 5 (水)	中日 (朝刊)
63 Advanced Science and Technology 開催：7、8日 小林 誠本学特別教授と飯島澄男同特別招へい教授が基調講演	12. 5 (水)	日刊工業
64 憂楽帳：50歳考 清水裕彦理学研究科教授が小林 誠本学特別教授を輩出した高エネルギー加速器研究機構から本学に転じ心境を語る	12. 5 (水)	毎日 (夕刊)
65 第25回博物館企画展「なんじゃ?もんじゃ? 高木典雄とコケの世界」開催：11月23日～2月2日	12. 5 (水)	朝日 (夕刊)
66 現代日本誤百科 (723)：参加者に「変更が入った」町田 健文学研究科教授	12. 6 (木)	中日 (朝刊)
67 博物館コンサート「クリスマスコンサート インカからの贈り物」開催：15日	12. 6 (木)	読売
68 目録：中村光廣現象解析研究センター准教授	12. 6 (木)	中日 (夕刊)
69 堀 勝工学研究科教授と石川健治同特任教授らは窒化ガリウム薄膜のエッチング時に発生する欠陥をプラズマを放電して薄膜に水素を注入し修復する技術を開発	12. 7 (金)	日刊工業
70 環境学研究科長に久野 覚同教授を選出	12. 7 (金)	中日 (朝刊)
71 ミクロの探検隊「微化石『放散虫』—電子顕微鏡を使ってさぐる形の不思議」開催：22日	12. 7 (金)	中日 (朝刊)
72 市民公開講座『「肺がん治療の最前線」—知ってください、肺がん治療の現在—』開催：10月28日 長谷川好規医学系研究科教授が開会のあいさつ、横井香平医学系研究科准教授が講演	12. 8 (土)	中日 (朝刊)
73 読売ビジネスサロン開催：11月21日 濱口総長が基調講演し「英語プラスワン」の教育の必要性を強調	12. 9 (日)	読売
74 2012年10月日経 TEST 学生団体対抗戦：中東正文法学研究科教授のゼミ ゼミ部門1位	12. 9 (日)	日経 (朝刊)
75 鈴木康弘減災連携研究センター教授がメンバーを努める原子力規制委員会の専門家会合が日本原子力発電株式会社敦賀原子力発電所の直下にある破砕帯を活断層の可能性が高いと結論づける	12.11 (火)	読売 他3社
76 第1回あいち小児在宅医療研究会開催：11月18日 三浦清邦医学系研究科寄附講座教授が基調講演、早川昌弘医学部附属病院教授が講演	12.11 (火)	中日 (朝刊)
77 現代日本誤百科 (724)：「デザイン性が高い」町田 健文学研究科教授	12.11 (火)	中日 (朝刊)
78 医人伝：総合病院南生協病院病理診断科部長棚橋千里氏本学卒業生	12.11 (火)	中日 (朝刊)
79 クリスマスレクチャーズ2012 in 名古屋開催：16日 飯嶋 徹現象解析研究センター教授と福井康雄理学研究科教授が講演	12.11 (火) 12.13 (木)	中日 (朝刊) 読売
80 現代日本誤百科 (725)：「ニキビが繰り返す」町田 健文学研究科教授	12.12 (水)	中日 (朝刊)
81 現代日本誤百科 (726)：「チームを好転する」町田 健文学研究科教授	12.13 (木)	中日 (朝刊)
82 書籍：「教師が育つ条件」今津孝次郎本学名誉教授著	12.13 (木)	中日 (朝刊)
83 数理ウェーブ開催：22日 大沢健夫多元数理科学研究科教授と名城大学理工学部教授江尻典雄氏が講演	12.13 (木)	中日 (朝刊)
84 工学研究科長に松下裕秀同教授を選出	12.14 (金)	中日 (朝刊)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

10月23日(火)～1月18日(金)
 場 所：附属図書館医学部分館
 2階入口ホール
 時 間：9:00～20:00(平日)、
 13:00～17:00(土曜日)
 休 館 日：日曜、祝日、年末年始
 入 場 料：無料

附属図書館医学部分館
**第2回ミニ展示会「ノートの中の青春
 -講義ノートが伝える医学生の歩み-」**



[問い合わせ先]
 附属図書館医学部分館 052-744-2505

11月5日(月)～3月8日(金)
 場 所：博物館野外観察園
 セミナーハウス2階
 時 間：10:00～16:00
 休 館 日：土・日・祝日
 入 場 料：無料

博物館野外観察園セミナーハウス展示
「蟲魚圖譜-解剖学者奈良坂源一郎の博物画」



[問い合わせ先]
 博物館事務室 052-789-5767

11月23日(金)～2月2日(土)
 場 所：博物館展示室
 時 間：10:00～16:00
 休 館 日：日・月曜日
 入 場 料：無料

第25回博物館企画展
「なんじゃ?もんじゃ? -高木典雄とコケの世界」



[問い合わせ先]
 博物館事務室 052-789-5767

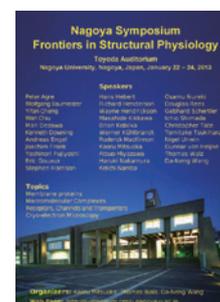
1月19日(土)、2月2日(土)
 場 所：インキュベーション施設
 1階プレゼンテーションルーム
 時 間：10:00～15:00
 対 象：大学院生、ポスドク
 参 加 費：無料

ビジネス人材育成センター
平成24年度後期 B 人セミナー
 テー マ：「Communication Styles」、「弁理士の業界と業務」(1/19)
 「博士に必要なスキル」、
 「プレゼンテーションスキル研修」(2/2)

[問い合わせ先]
 社会貢献人材育成本部
 ビジネス人材育成センター 052-747-6490

1月22日(火)～24日(木)
 場 所：豊田講堂
 時 間：9:00～19:00 (1/22)、
 9:00～19:30 (1/23)、
 9:00～17:30 (1/24)

名古屋シンポジウム
 内 容：講演、ポスターセッション



[問い合わせ先]
 細胞生理学研究中心
 052-747-6794

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

1月28日(月)

場 所：理学南館1階坂田・平田ホール
時 間：14:00～17:30
参 加 費：無料

[問い合わせ先]

高等研究院 052-788-6051

第8回高等研究院レクチャー

テ ー マ：「近代を問う東アジア」
講 演 者：坂本達哉氏（慶應義塾大学教授）、
羅 衛東氏（浙江大学副学長）、
キリル・O・トンプソン氏（国立台湾大学人文社会高等研究院副院長）

1月29日(火)、2月12日(火)

場 所：カフェフロンテ
時 間：18:00～19:30
参 加 費：無料
(会場にてドリンク等の注文が必要)

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

げんさいカフェーGen Science Caféー

[第20回]
講演題目：「大規模災害時の電力需給を考える」
講 演 者：都築充雄（減災連携研究センター寄附研究部門准教授）
[第21回]
講 演 者：宮腰淳一（減災連携研究センター寄附研究部門准教授）

1月29日(火)

場 所：情報基盤センター4階演習室
時 間：13:00～14:30
定 員：40名
対 象：一般
参 加 費：無料

[問い合わせ先]

情報推進部情報推進課 052-789-4368

平成24年度

第10回情報連携統括本部公開講演会・研究会

講演題目：「自動車情報システム（仮題）」

1月30日(水)

場 所：環境総合館1階レクチャーホール
時 間：18:00～19:30
参 加 費：無料

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

第86回防災アカデミー

講演題目：「三陸津波の歴史と村の復興」
講 演 者：北原糸子氏（立命館大学教授）

2月9日(土)～3月9日(土)

場 所：博物館展示室
時 間：10:00～16:00
休 館 日：日・月曜日
入 場 料：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

第26回博物館企画展

「ボタニカルアートと明治の博物画」



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

2月16日(土)、3月9日(土)

場 所：博物館展示室
時 間：14:00～15:00
参 加 費：無料

博物館コンサート

2月16日(土)
テ ー マ：「悠久のインドクラシック音楽
—サントゥール&タブラ—」

演奏曲目：「シルクロード」、
「ラーガ・パハドゥーヒマラヤの山—」、
「ガット in パハドゥー広がる山々の
風景—」他

出 演：安藤真也氏 (サントゥール)、
原口 順氏 (タブラ)



3月9日(土)

テ ー マ：「愛と自然のバロック音楽—イギリス、フランスの香り—」

演奏曲目：「グリーンスリーブス」作者不詳、
「かつて木陰ほど (Ombra mai fù)」ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル、
「森の妖精」「蜜蜂」フランソワ・クーブラン 他

出 演：加藤佳代子氏 (ソプラノ)、杉浦道子氏 (チェンバロ)

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

2月18日(月)

場 所：ES 総合館 1階 ES 会議室
時 間：13:30～16:30
参 加 費：無料

総合保健体育科学センターセミナー

テ ー マ：「現代の日本社会と青年の自殺問題について考える」

内 容：講演、指定発言、討論会
講演題目：「現代の日本における自殺と社会について…
社会学の古典の見方から」

講 演 者：阪本俊生氏 (南山大学教授)

[問い合わせ先]

総合保健体育科学センター 052-789-5778



2月20日(水)、27日(水)

場 所：博物館講義室
時 間：13:00～15:30
定 員：20名
対 象：初心者(2日間とも参加可能な方)
参 加 費：1,000円 (材料費)

体験講座「初めての博物画—ボタニカルアート」

講 師：東海林富子氏 (植物画家)

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



名大トピックス No.236 平成25年1月17日発行

編集・発行/名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

山篠貴史生命農学研究科助教
による細胞生物学実験の授業
の様子
(平成24年11月26日)



129 正門がない東山キャンパスの謎

なぜ名大の東山キャンパスには正門がないのか。

これが名古屋の謎の1つとして話題になっています。2008(平成20)年9月の中日新聞に記事が載ったほか、昨年10月には東海テレビの「スーパーニュース」で特集されました。大学のシンボルともいえる正門がないことに違和感を覚える人も多いようです。

実は、名大が創立された当初は正門がありました。1939(昭和14)年に創立された名古屋帝国大学は、名古屋市中区西二葉町(現在の東区白壁、明和高校付近)に仮校舎を置き、そこに大学本部がありました。立派な正門が見られます(写真1)。

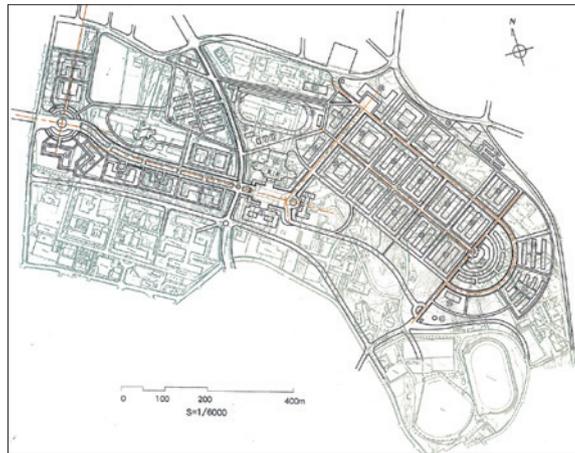
その後、1944年に本部が東山に移転しますが、ここにも名帝大は正門をつくる予定でした。キャンパスの西端、現在の教育学部附属学校の運動場のあたりにロータリーをつくり、その先に正門を置く計画です(図2)。戦後もこの計画は受け継がれ、澁澤元治初代総長が46年1月に辞任す

る際の引き継ぎ文書にも、建築委員会においてこの位置に正門を設けることになった旨が記されています。

ところが、まもなくこの戦前のキャンパス計画は全面的に見直され、正門の位置も変更されました。1954年の計画図では、現在の教育学部附属学校の北側、鏡ヶ池の西側に大きな入口が想定されています(図3、4)。ただ、この部分の多くは現在の名大の区域ではありません。

やがてこの正門もキャンパス計画から消えますが、その理由について、1963年から69年にかけて総長を務めた篠原卯吉名誉教授の興味深いコメントが、1989(平成元)年10月の中日新聞に見られます。「キャンパス北西隅の鏡ヶ池あたり」に、「堂々とした入り口」をつくる予定だったが、いつのまにかそこが大学と民有地との境界になってしまったので断念したというのです。

謎は完全には解けないままですが、何か情報等をお持ちでしたら、ぜひ大学文書資料室までお寄せください。



1	2	5
3	4	

- 1 名古屋帝国大学西二葉仮校舎の正門。
- 2 名古屋帝国大学計画案(1942年)分析図(木方十根氏・河野頭一氏作図)。現在の東山キャンパス図に、1942年の計画図(黒い実線)を重ねたもの。
- 3 名古屋大学学園計画図(1954年、愛知県公文書館所蔵)。文系地区など、建物の配置が現在とはかなり異なっている。また現在の博物館の南側の土地も取得する計画で、ここに体育館を建てる構想であった。
- 4 図3北西部のアップ。グリーンベルトが西端で北へ折れ、正門と思われる入口へと続いている。
- 5 1960年に建設された豊田講堂は、設計者の榎文彦氏により、門としての位置づけを与えられた。東山に正門がない理由の1つと言えるかもしれない。